

ミュケナイ文化拡大期の土器の編年に関する一考察

——戦車文クラテルとミュケナイ式花文様の変遷について——

土 居 通 正

はじめに

三時期に大別されているギリシア本土の青銅器時代の最後の時期は、ほぼ同時期とされるクレタ島のミノス後期 (Late Minoan, LM と略す) と区別して、ヘラドス後期 (Late Helladic, LH と略す)、或いはミュケナイ時代と呼ばれている。この時代はミュケナイ式土器 (Mycenaean Pottery) と呼ばれるヘラドス後期文化を特徴づける土器の編年により、LHⅠ・LHⅡ・LHⅢの三時期に区分されている。

LHⅢ期については、A、B、Cの亜区分が早くから一般に認められており、そのうち、特にLHⅢA期とLHⅢB期は、両時期のミュケナイ式土器が、シチリア島から東地中海沿岸一帯にかけて広範に分布し、多量に出土していること (Stubbings, 1951, Taylour, 1958)、又、ギリシア本土に於いても、両時期に属する遺跡数が、ミュケナイ時代の遺跡の中で最も多いこと (Simpson, 1965)、などから、ヘラドス後期文化の拡大期とされている (Stubbings, 1975)。

LHⅢA期は大体前14世紀、LHⅢB期は大体前13世紀とされるが、この2世紀間のミュケナイ式土器の編年研究は、ヘラドス後期文化のギリシア本土内外に於ける発展・拡大の様相を解明していく上で基礎となるものである。しかし、両時期のミュケナイ式土器の区別には、最大限の注意を要するとされ (Wace, 1953 p. 90)、その境界の実年代には、現在、前1350年から前1280年まで、70年もの開きが見られるのである。

LHⅢA・LHⅢB両時期の土器の区別が現在も必ずしも明瞭でない理由として、当時の土器の顕著な保守的性格と、多量な出土例にも拘わらず、その多くが、長期間使用された家族墓からの出土品であり、層位的発掘例が少ないことが挙げられるが、小論では、ミュケナイ式土器の中でも、その型式変遷を比較的細かく辿ることが可能と思われる戦車文クラテルと呼ばれる一群の土器を取り上げ、その型式学的研究から、LHⅢA期とLHⅢB期の土器の区別の問題とLHⅢB期開始の実年代の問題を再検討し、若干の考察を試みたい。

一 研究史概要

まず、ミュケナイ式土器編年の研究史の概要を、LHⅢ期の細分化の過程を中心に述べておきた

い。最初にヨーロッパに知られたミュケナイ式土器の例は、1860年代にロードス島の墓地で発掘されたものとされる。これらは大英博物館で Greco-Phoenician として分類されていたが、1874年から1876年にかけてのミュケナイに於ける H. Schliemann の発掘により出土した土器が発表されると、両者の関係がすぐに論じられ (Forsdyke, 1925, xxxviii, n. 4), 1886年には当時の所謂ミュケナイ式土器の分類が A. Furtwängler と G. Löschcke により初めて試みられた¹⁾。

ミュケナイ式土器の実年代に関しては、1890年に、F. Petrie が、把手の形から 鑑壺 (stirrup jar) と呼ばれるものの最も退化した例として挙げた、エジプトの Tell el Yahudiyeh 出土品を前1050年頃とし、エジプトの Gurob から実年代を持つエジプト製品と共に発見された鑑壺により、最も古い鑑壺の年代を前1400年頃とした (Petrie, 1980a)。更に、Petrie は、1894年に、Akhenaten (Amenophis IV 世, 前1379—前1362, Hayes による; 前1368/63—前1351/45, Hornung による) の治世第4年から彼の没後数年して再び Thebes に都が移されるまでの短期間都として使われ、以後放棄された el-Amarna で出土したミュケナイ式土器の破片を発表した (Petrie, 1894) が、これらは現在なおミュケナイ式土器の実年代にとって最も重要な意味を持っている。

20世紀にはいり、A. Evans によりクレタ島の Knossos で発掘が開始され、クレタ島の青銅器時代文化がミノス文化として三時期に区分されると、ギリシア本土のミュケナイ式土器はミノス後期文化の土器のギリシア本土に於ける派生として位置づけられた。一方ギリシア本土に於いても、特に Corinth 周辺の発掘で、初期青銅器時代から後期青銅器時代までの土器の序列が層位的に確認されると、A. Wace と C. Blegen は、ギリシア本土の青銅器時代文化に対し初めてヘラドスの名称を用い、これをミノス文化の三時期にほぼ対応する三時期に区分し、ミュケナイ式土器は、ヘラドス後期文化を特徴づける土器とされた (Wace & Blegen, 1916)。ヘラドス後期は、その後1921年に、Corinthia の Korakou の発掘報告書で、Blegen により更に三時期に細分され、LHⅢ期は、Evans が Knossos の新宮殿の崩壊以降としたLMⅢ期とほぼ同時期とされた。

LHⅢ期の細分化は、1920年代に行なわれたミュケナイを始めとする Argolis での発掘により進められた。Wace によるミュケナイの発掘では、有名な獅子門の西翼と“穀物倉”と呼ばれた住居址に挟まれた地点で、約4mの厚さの堆積が発掘され、その結果、Wace は、穀物倉の破壊に関係づけられた層より下層出土の土器を Tell-el-Amarna Style と呼び、穀物倉破壊時の土器を Granary Class と呼んで、LHⅢ期を二分した (Wace, 1921)。

1925年には E. J. Forsdyke も後期ミュケナイ式土器 (LHⅢ期のミュケナイ式土器) をA段階とB段階に二分した。しかし、Forsdyke は、Wace の Tell-el-Amarna Style に見られる花文様は、el-Amarna 出土のミュケナイ式土器片に見られる花文様に比べ、便化が進んでいるとして、Wace の Tell-el-Amarna Style をB段階の初頭に位置づけ、A段階とB段階の境界の実年代を前1250年頃とした (Forsdyke, 1925, pp. xxxviii-xlii)。

1928年には、Zigouries の“陶工の店”と呼ばれた住居址の発掘報告書で、Blegen は床面上と床面下の土器群を区別し、前者は Kylix と呼ばれる高杯を多く含む点で Wace の Tell-el-Amarna

Style と比較され、後者は、Wace が el-Amarna の出土品と比較していたミュケナイの505号墓羨道内の堆積中の土器と比較された (Blegen, 1928, pp. 166~7; Wace, 1932, p. 17, Fig. 8)。

Blegen は、“陶工の店”の床面上の土器をLHⅢ期の中間段階としたが、1938年には、M. B. Mackeprang が、LHⅢ期をA, B, Cの三時期に細分し、LHⅢA期を前14世紀、LHⅢB期を前13世紀、LHⅢC期を前12世紀とする編年を発表した (Mackeprang, 1938)。

1941年には、LHⅢ期の三時期を更に細分した詳細なミュケナイ式土器の編年体系がスウェーデンの A. Furumark によって発表された (Furumark, 1941a; 1941b)²⁾。小論で扱うLHⅢA期とLHⅢB期に関しては、LHⅢB期は細分されなかったが、従来のLHⅡ期とLHⅢA期の土器型式間のギャップに対し、LHⅢA₁期が新たに設定され、従来のLHⅢA期はLHⅢA₂期とされ、LHⅢA₂ early と LHⅢA₂ late の二時期に区分された。各時期に与えられた実年代は、LHⅢA₁期は前1425年—前1400年、LHⅢA₂e 期は前1400年—前1375年、LHⅢA₂l 期は前1375年—前1300年、LHⅢB期は前1300年—前1230年とされた (CMP, pp. 110~5)。

Furumark のミュケナイ式土器の編年体系は、これを層位的に裏付ける資料に乏しかった為、Blegen や Wace によって主観的な理論として批判されてきた (Blegen, 1951; Wace, 1953)。しかし、1939年に始められ、1950年に再開された Wace らによる、ミュケナイ城塞内外に於ける発掘で、主なもので10の、全体でLHⅢ期の殆んどをカバーする、比較的短期間の年代幅が推定される住居址関連の土器の堆積が発見され、詳細に研究された結果 (French, 1963, 1964, 1965, 1966, 1967; Mountjoy, 1976; Wardle, 1969, 1973), Furumark のLHⅢA期の細分はほぼ認められ、更に、LHⅢA₂l 期に於ける土器型式の発展も示唆され (French, 1965, p. 196), 又、LHⅢB期はLHⅢB₁期とLHⅢB₂期に細分されるに至った。

以上が、現在までのミュケナイ文化拡大期の土器編年の研究史概要である。

二 LHⅢA₂l 期とLHⅢB期の土器型式の区別の問題

LHⅢA期とLHⅢB期の分割線をどこに引くかについては、ミュケナイの住居址関連の土器の堆積の詳細な研究により、Zigouries Kylix と呼ばれる特徴的な高杯の出現と、Deep Bowl と呼ばれる碗形土器の盛行が、LHⅢA₂l 期とLHⅢB₁期を区別する確実な指標とされ (French, 1965, p. 159; 1966, p. 235), 一方、Mackeprang がLHⅢB期の1つの指標とした、巻貝文様が縦向きに描かれた Kylix については、LHⅢA₂l 期に既に盛行していたことが確認された。Zigouries Kylixは、Zigouries の“陶工の店”の床面上で始めて発見された、高い脚部、浅い杯、薄い口唇部に器形的特徴を持つ高杯で、口唇部は塗られず、様式化された特殊な花文様、或いは巻貝文様が左右の把手で二分された杯の中央に描かれている。この高杯は、ミュケナイのLHⅢA₂l 期の堆積から出土する、比較的深い杯と厚い口唇部を持ち、口唇部が塗られ、数個の文様が杯の周囲に描かれる Kylix とは明瞭に区別される (French, 1966, p. 219, 222)。Furumark は Zigouries Kylix を彼の器形分類で FS 258 としてLHⅢB期に位置づけ、Deep Bowl をLHⅢA₂l 期に既に充分

発達していたとした (MP, p. 49)。しかし、後者の位置づけについては、その出現は LHⅢA₂期の最末期とされ、(French, 1965, p. 194) Furumark の説は修正された。

この様に、現在、ミュケナイ式土器でも広口の器種については、LHⅢA₂期とLHⅢB期の区別が明らかにされてきている。しかし、ミュケナイで発見された LHⅢA₂期の土器の堆積からは、実年代を持つエジプトの Gurob や Kahun、或いは、el-Amarna の堆積から発見され、ミュケナイ式土器の実年代の問題にとって最も重要視される鍔壺を始め、狭口の器種の変遷に関する充分な知見は得られなかった。そこで現在も、鍔壺を始めとする多くのミュケナイ式土器の分類は、Furumark の型式学的規準によっている。しかし、Furumark の LHⅢA₂期とLHⅢB期のミュケナイ式土器の型式学的規準は、同じ鍔壺に異なる Furumark の器形番号が与えられ、その編年上の位置が両時期に分かれる場合がある様に⁹⁾、必ずしも明確なものではない。この為、ミュケナイに於ける LHⅢA₂期の住居址に関連した、狭口のミュケナイ式土器の堆積の発見が極めて重要であるとされている (French, 1965, p. 193)。

ここで、次章以下本論で詳細に分析する予定の、Furumark がミュケナイⅢ期の花文様 (FM 18) と呼んだ文様 (以下、花文様と略す) について、Furumark の分類を検討してみたい。この花文様は、図1に示した様に、花卉、がく、めしべ、茎の各部分に区別出来、又、めしべは、普通更に、柱頭と芯部に区別出来、一般にミュケナイ式土器に描かれる幾何学的で単純な文様の中では、比較的複雑で、細かい編年の指標として有効と思われるものである。Furumark は、これを A, B, C に区別している (MP, pp. 284~96)。FM18Aは、がくの形が渦巻状のもの、FM18Bは、しゅろ文様や蛸文様の要素を含むもの、FM18Cは、がくの形が渦巻状でないものとされ (図3参照)、それぞれについて、各時期の特徴が挙げられている。鍔壺の肩部文様として最も普通に見られる FM18C の花文様について見ると、LHⅢB期のものは、LHⅢA₂期のものに比べて、より抽象的で幾何学的であるとされている。しかし、両者の区別の具体的な規準は、Furumark が例示した図からは、必ずしも明らかでなく、両時期に区別された花文様個々について比較すると、先の Furumark の分類規準からは区別出来ない場合も認められる¹⁰⁾ (MP p. 293, Fig. 45 参照)。

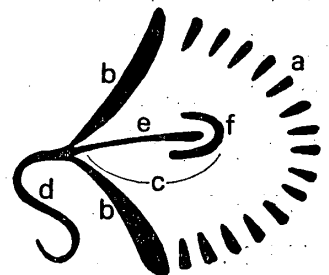


図1 花文様の各部分
a 花卉, b がく, c めしべ,
d 茎, e 芯部, f 柱頭

以上に見た様に、LHⅢA₂期とLHⅢB期の土器の区別は、現在も不明瞭な点が残されているが、この問題に対しては、French の言う様な土器の堆積の発見が待たれる一方、既知の資料を更に詳細に研究し、LHⅢA期からLHⅢB期に至る土器の型式変遷を追求する努力も必要であろう。

この様な研究にとって重要視されるのは、LHⅢA₂e 期からLHⅢB期までの時期に位置づけられたクラテルと呼ばれるミュケナイ式土器の一器種である。何故ならば、クラテルの画面には多くの文様が描かれる為、それら個々の文様の詳細な分析と共存関係から、描かれた文様の型式変遷の

の詳しい検討が可能と思われ、又、これらの文様の中には、鍔壺を始めとする狭口の器種にしばしば描かれ、これらの器種の型式変遷の理解にとって重要な指標となるとと思われる前述のFM18Cの花文様が見られるからである。

以下では、クラテルの中でも最も資料が多い、馬が人物を乗せた戦車を引く図（以下、これら全体を戦車文と呼ぶ）が描かれた、一般に“戦車文クラテル”（chariot-crater）と呼ばれるものについて、その器形と文様を詳細に検討したい。

三 戦車文クラテルの型式学的検討

クラテルと呼ばれるミュケナイ式土器には頸部を持つものと持たないものがあり、又、大形のDeep Bowlも普通、クラテルと呼ばれており、それぞれに戦車文が描かれている例が見られる。ここでは、花文様が充填文として描かれている、頸部を持つ戦車文クラテルを中心に型式学的検討を進めることにする。クラテルに描かれた戦車文は、その原型としてフレスコ壁画に描かれた戦車の図（図2参照）が考えられている（MP p.242, 332, 436, 437）。ここでまず、これらの壁画の図に比較される、二点の頸部を持たないクラテルに描かれた戦車文について見ておきたい。

この二点のクラテルは、キプロス島のVerghi出土例（図版1—1）と、同じくキプロス島のKourion出土の通称“Window Crater”（図版1—2）で、描かれた戦車文細部の入念な描写の点で、フレスコ壁画の図に比べられる（Karageorghis, 1957, p. 270）。又、“Window Crater”には、その名称の由来となった、画面を縦横に区切る帯が見られ、Verghi出土例には、同じく画面を縦に区切る帯と共に、この帯と同じ描法による波状の帯が、馬のひずめの下、その他に見られる。こ

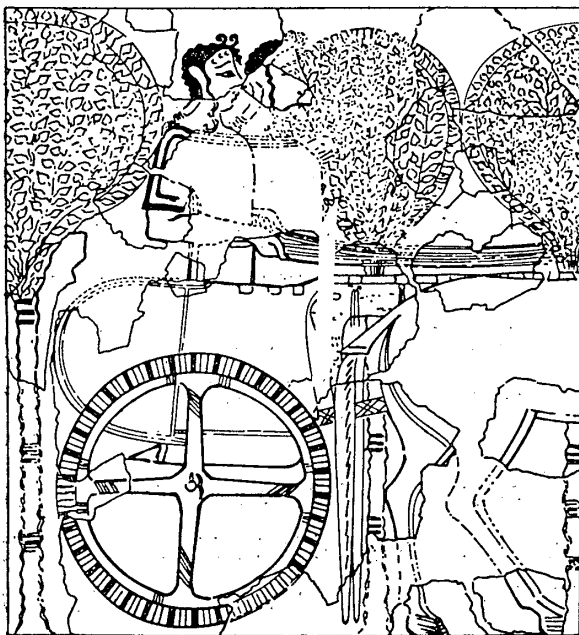


図2 戦車の壁画 ティリュース出土
（Hooker, 1977, p.248, Fig.7 より引用）

これらの帯は、フレスコ壁画の岩の表現がその原型と考えられている（MP p.328），“積石文”或いは“岩文”（FM 34）と呼ばれるものに分類出来るが、その充填文的性格は他のクラテルに見られる積石文に比べて弱く、Verghi出土例の馬のひずめの下に見られるものは、原型と考えられるフレスコ壁画の岩の表現に近いものである。更に、これら二点のクラテルには、フレスコ壁画と同様、幾何学的文様が充填文として描かれていない点も注意される⁵⁾。

頸部を持つ戦車文クラテルに於いても、これらのクラテルに近い文様の特徴を持つものは、古い時期のものと考えられる。以下、頸部を持つ戦車文クラテルについて、器形、文様の順に、見て行きたい。

〔器形〕 この種のクラテルの器形全体のプロポーションを見ると、器高に対する頸部高の割合は、7分の1に過ぎないものから、器高の4分の1以上を占めるものまで、様々である。文様の点で最も古い時期に属すると見られるキプロス島の Maroni 出土例 (C. P. 1403) は、頸部が非常に低いが、これに対し、LHⅢB期の指標とされる Zigouries Kylix に描かれる特徴的な花文様を持つクラテルには、この様に低い頸部は見られず、頸部高の非常に高い例が見られる。脚部は、C. P. 1403のクラテルの様に頸部が非常に低い例では、胴下部と区別出来ないが、頸部高が器高の5分の1に近い例には、殆んど区別出来ないものと並んで、区別出来るものも見られる。C. P. 1403のクラテルは、クノッソス新宮殿崩壊前 (LMⅢA₁ 期) のものとされる宮殿倉庫出土のクラテルと、ほぼ同形である (Popham, 1970, Pl. 8a 参照)。

頸部を持つクラテル一般について器形各部の作りを見ると、頸部高の非常に低いものから、器高に対する割合が5分の1に近いものまでのクラテルには、把手の中心線上に稜が付けられる例、把手の肩部接合部が、肩部に折り合わされた様に厚みを持たされた例、頸部と肩部の境界に突帯が施された例、把手と口唇部との接合部上に、リベットを模した粘土瘤が付けられている例 (Buchholz & Karageorghis, 1973, p. 437, 1622参照) が見られる。これらの部分は、模倣された金属製クラテルの特徴を留めるものと思われるが (Evans, 1935, p. 311, Fig. 245参照)、器高の4分の1以上を占める様な高い頸部を持つクラテルには、この様な器形的特徴は見られない。又、頸部高の高いクラテルに見られる口唇部から頸部になだらかに移行する口縁部の形態は、低い頸部を持つクラテルには筆者の知る限り認められない⁶⁾。

以上から、頸部を持つ戦車文クラテルの器形の変遷の一般的傾向として、頸部は、初め低く、次第に高くなり、脚部は、比較的早くから区別されるものが出現し、初めは保持していた金属器に特徴的な形態は、時代が下ると消滅したと考えられる。

〔文様〕 先述した様に、先に見た二点の頸部を持たないクラテルに文様の点で最も近い例は、C. P. 1403のクラテルである。このクラテルの把手で二分された各々の画面には、Verghi 出土の頸部を持たないクラテルと同じく2組の戦車文が画面下を区切る帯上に車輪とひづめを付けて描かれている。一方、頸部の高いクラテルの片側画面に描かれる戦車文は常に1組であり、画面の広い空間を埋める為に馬の胴体が極端に引き伸ばされた例や、車輪とひづめが画面下を区切る帯上から下にはみ出ている例が見られる。又、古い段階の例では、戦車文の細部は、入念に描かれており、この点は、例えば、戦車の車体の下部が車輪を通して描かれる描写に認められる。新しい段階の例についてこの部分を見れば、車輪と重なる車体の下の部分は描かれず、車輪の上に直接車体載っているかの様である。又、他の部分についても、新しい段階の例には直線的に描かれ硬直化した馬の脚部や車体からはみ出して描かれた戦車上の人物の様な退化した表現が見られる。以上から、戦車文については、始めは構図的配慮が慎重になされ、図柄の細部も表現されていたのが、後には構図的配慮が薄れ、描写的表現も退化したと言えよう。

戦車文クラテルの画面には、普通、戦車文の他に、画面下を区切る帯上に接して、戦車文の前後

に植物文や人物が描かれ、これらによって区切られた空間は、種々の幾何学的な文様で埋められている。これらの充填文は、LHⅢA₂期に盛行し、LHⅢB期になると衰退するとされるが(MP p. 435)、先に見た二点の頸部を持たないクラテルにはこの様な充填文は見られない。C.P.1403のクラテルを見ても、多くの空間が充填文が入れられないで残されていることから、戦車文クラテルの画面に入れられる充填文は、最初は少なかったが、時代が下ると多くなり、再び減少したと考えられる。充填文自体も変化したと考えられるが、中間的な段階のクラテルに描かれた馬の脚と脚、後脚と尾、等の空間にしばしば見られる短線が重ねられた帯状の文様は、C.P.1403のクラテルに描かれた馬の後脚との尾の間に見られる積石文から見て、この積石文の便化したものと思われる。

種々の充填文の中で最も注目されるのは、花文様である。先述した様に Furumark は、花文様をA, B, Cに分類したが、ここでは次の7類に分類することにする(図3参照)。

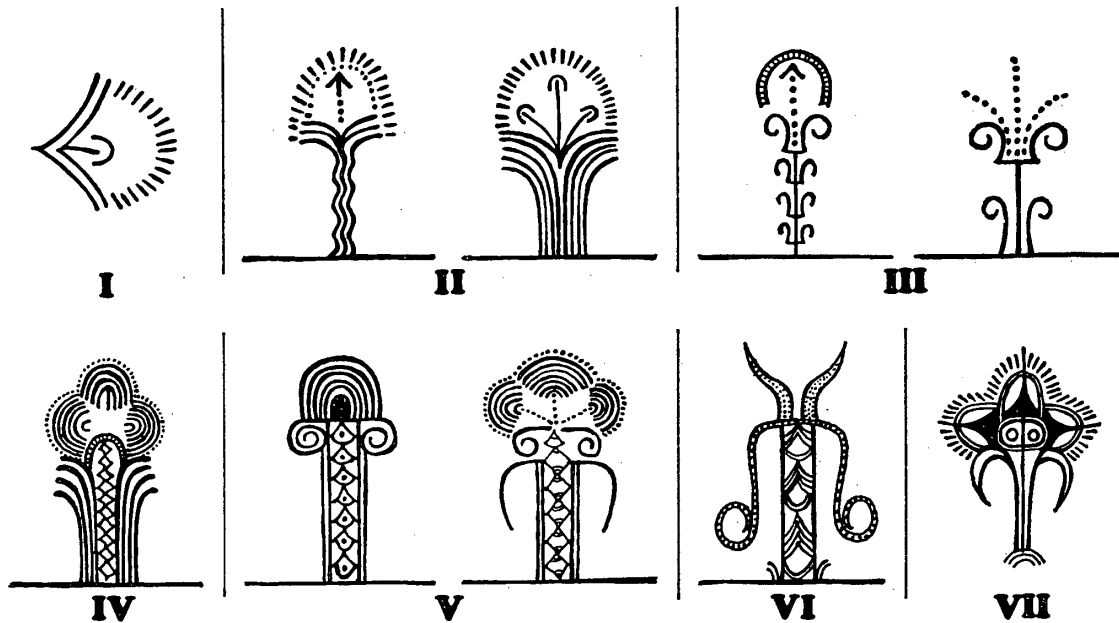


図3 花文様の分類

I. Furumark, 1941a, p. 293, Fig. 45 : 84. II(left). Ibid., p. 293, Fig. 45 : 102. II(right). Ibid., p. 293, Fig. 45 : 66. III(left). Canciani, 1966, Pl. 99 : 5. III(right). Furumark, op. cit., p. 287, Fig. 42 : 2. IV. Weinberg, 1949, Pl. 23 : 36. V(left). Furumark, op. cit., p. 287, Fig. 42 : 25. V(right). Ibid., p. 291, Fig. 44 : 38. (cf. Blegen, 1928, p. 146, Fig. 137 : 4, 5, 6, 7) VI. Kaiser, 1976, Pl. 32 : 2. (cf. Blegen, op. cit., p. 146, Fig. 137 : 1, 2, 3, 8, 9). VII. Bazant, et al, 1978, Pl. 5 : 5. (cf. Furumark, op. cit., p. 291, Fig. 44 : 33, 44)

I類：がくの形は渦巻状でなく、茎を持たないもの(屈曲した短い茎を持つものはI類に含める)。

II類：がくの形はI類と同じであるが、画面下を区切る帯から伸びる長い茎を持つもの。

III類：II類と同じく茎を持つが、がくが渦巻状である点でII類と区別されるもの。

IV類：がくの形と長い茎の点でII類と比べられるが、茎に種々の文様を加えられる点、又は、茎上端からひげ状の突起が左右下方向に伸びる点で、或いは、その両方の点でII類と区別さ

れるもの。

V類：Ⅳ類と類似の茎を持つが、がくの形が渦巻状の点でⅣ類と区別されるもの。

Ⅵ類：Ⅳ類・Ⅴ類と類似する茎を持つが、茎上端から左右上方向に舌状のパターンが伸びるもの。

Ⅶ類：茎上端からひげ状の突起物が左右下方向に伸び、一對の円、又は同心円が花卉両端近くに入れられるもの。

これらの各類の花文様の中で、Ⅴ類とⅥ類はミュケナイの LHⅢA₂Ⅰ期の堆積中には見られず、ギリシア本土内外で出土したこの花文様が描かれた Kylix は、Zigouries Kylix か、又は、器形的に、これと比べられるものであることから、Ⅴ類とⅥ類の出現した時期は、LHⅢB期以降と考えられる。Ⅴ類、Ⅵ類と類似するⅣ類についても、LHⅢA₂Ⅰ期に出現したとする証拠はなく、その出現の時期は恐らく、Ⅴ・Ⅵ類と同時期であろう。様式化された奇妙なⅦ類の花文様については、しかし、ミュケナイの LHⅢA₂Ⅰ期の堆積中に既に見られ (French, 1965, p. 164, Fig. 2: 5, 8 参照)、又、Zigouries Kylix よりも古い器形的特徴を持つ Kylix (p. 237 参照) に描かれる例がある (図3—Ⅶ)。

戦車文クラテルには、筆者の知る限り、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ類が見られるが、充填文的性格の強いⅠ類の花文様の他は、画面下を区切る帯に茎又は幹を付けて戦車文の前後に描かれるパピルス文様 (FM11) や、しゅろ文様 (FM15) と同様に、単なる充填文というよりむしろ、戦車文の背景的性格を持つと思われる (図2 参照)。

Ⅰ類の花文様が戦車文クラテルの画面にどの様に描かれるか辿ってみると、頸部が低く、器形各部に金属器的形態を残す戦車文クラテルでは、馬の背上や腹下の空間には、他の充填文が入れているが、戦車の後下や把手下の空間、或いは、並べて描かれたⅡ類の花文様の間の空間にはⅠ類の花文様が見られる。一方、器形各部に金属器的形態を残さず、頸部高もそれ程低くない中間的段階の戦車文クラテルでは、馬の背上や腹下の空間にもⅠ類の花文様が入れられ、又、並べて描かれたⅡ類の花文様の間の空間には、Ⅰ類の花文様の代わりに円花文が入れている。頸部高の高い新しい段階の戦車文クラテルでは、初めてⅥ類の花文様が見られ、又、Ⅱ類の花文様も、しばしば見られるが、Ⅰ類の花文様の例としては、様式化した菱形の花文様が筆者の知る限り、唯一の例である。戦車文クラテルに充填文として描かれたⅠ類の花文様は、他の充填文が衰退し始めると、戦車文クラテルの中間的段階では、馬の背上や腹下の空間に描かれたが、新しい段階では、他の充填文と同様、衰退したと思われる。

四 頸部を持つ戦車文クラテル変遷の五段階

頸部を持つ、主にキプロス島出土の戦車文クラテルの器形と文様の変遷の一般的傾向の検討から、この種のクラテルの変遷過程には、次に述べる五段階が区別出来ると思われる。

第1段階 キプロス島の Maroni 出土の C. P. 1403 のクラテル (図版1—3, 4) は、器高の7分の1に満たない低い頸部を持ち、最大径部から底部にかけてのプロフィールは、ほぼ直線的で

あり、把手の中心線上には稜が付けられている。金属器的形態を保持する点と共に、このクラテルの全体のプロフィールは、クレタ島の Knossos 宮殿第 8 倉庫出土の LMⅢA₁ 期に位置づけられるクラテルと比べられる古い時期の特徴を示している。戦車文は、クラテルに描かれた例中最も古いと考えられる、頸部を持たない Window Crater や Verghi 出土のクラテルに見られるものと類似する。又、二組の戦車文の間に描かれた空間を区切る積石文は、これら二点の頸部を持たないクラテルに見られる積石文に近い性格を有している。このクラテルに代表される段階を第 1 段階とする。

第 2 段階 大英博物館所蔵のキプロス島の Maroni 出土のクラテル（図版 2—1, 2）は、C.P. 1403 のクラテルと比べ、頸部がやや高く、胴下部がやや彎曲する点以外は、器形的に殆んど変わらない。又、戦車文についても、大きな相違は認められない。しかし、戦車文の前後に植物文が描かれ、戦車文とこれらの植物文で区切られた空間には、第 1 段階に見られた積石文から生じたと考えられる短線が重ねられた帯状の文様を始め、種々の充填文が入れている。又、車輪内にも充填文が見られる。これらは、第 1 段階には見られない新しい特徴である。G. Pierides 氏所蔵のクラテル（図版 2—3）と Beirut の南方約 70km の Tell Dan からの出土例（図版 2—4）は、脚部が区別出来、戦車文は各画面に一組しか描かれず、前者の車体の表現には便化が認められる。しかし、これらのクラテルは低い頸部と把手に金属器的形態を残す点、種々の充填文が盛行している点で上記のクラテルと比べられる。以上のクラテルに代表される段階を第 2 段階とする。

第 3 段階 キプロス博物館所蔵 A1645 の戦車文クラテル（図版 3—1）は、頸部高が器高の 5 分の 1 以上を占め、把手の中心線上には稜を持たない。又、充填文は第 2 段階に比べて少なく、馬の背上や腹下の空間には I 類の花文様が描かれている。Quirk 文（FM48）と呼ばれる S 字状連続入組み文は、新しい段階の戦車文クラテルに見られる数少ない充填文であるが、この文様が、馬の尾と後脚の間に見られる点も注意される。キプロス島の Enkomi 3 号墓出土（N°163）例（図版 3—2）、シリアの Ugarit 出土例（図版 3—3）も、把手が稜を持たず、充填文がやや衰退している点で、A1645 のクラテルと比べられる。これらのクラテルに代表される段階を第 3 段階とする。

第 4 段階 A. Georgiades 氏所蔵の戦車文クラテル（図版 4—1, 2）は、A1645 のクラテルと器形的に大きな相違は認められないが、I 類の花文様は、馬の前方に見られるだけであり、そのめしべは、一筆で描かれた便化したものである。馬の表現も、目と耳が省略され、後脚は直線で表わされるなど便化している。更に、把手下の空間には、これまで見られなかった巻貝文が描かれている。Sèvres 美術館所蔵例（Vermeule, & Karageorghis, 1982, IV. 55）、Enkomi 11 号墓出土（N°33）例（図版 4—3）は、I 類の花文様の衰退とめしべの表現の点で、Georgiades 氏所蔵例と比べられる。Enkomi 11 号墓出土例の把手下の空間には、イルカ？が描かれているが、馬が戦車を引く地上の情景と内容的に調和しない巻貝やイルカの画面への導入は、新しい段階を示す一つの特徴かも知れない。これらのクラテルが第 3 段階のものより時期的に下るものであることは明らかであり、この段階を第 4 段階とする⁷⁾。

第5段階 ギリシア本土の Corinth 出土例 (図版5—1, 2) は、極端に高い頸部を持っている。ボン大学美術館所蔵 (N°777) 例 (図版5—3) は、肩部の膨らみが殆んど見られず、外反した頸部上部がなだらかに口唇部に至る口縁部を持っている。これらの器形的特徴は、第4段階までのクラテルには見られないものである。これらのクラテルに描かれる花文様にはⅠ類の花文様は見られない。Corinth 出土例にはⅣ類の花文様が、ボン大学所蔵例にはⅥ類の花文様が見られ、頸部高が器高の4分の1を超える、キプロス島の Hagia Paraskevi 出土例 (図版5—4) にはⅡ類の花文様が見られるだけである。その他、極端に引き伸ばされた馬の胴体 (ボン大学所蔵例)、戦車の車体からはみ出した人物 (Corinth 出土例)、手綱の下に見られる硬直化した表現 (Corinth 出土例)、胴体がⅤ・Ⅵ類の花文様の茎と共通する表現による人物 (Hagia Paraskevi 出土例) などは、第4段階までのクラテルに見られないものである。これらのクラテルに代表される段階を第5段階とする。

五 花文様の変遷

各段階の戦車文クラテルに描かれた花文様を見ると、時代が下るにつれて、各部分に新しい要素が現われている。図4は、各段階の戦車文クラテルに描かれたⅠ・Ⅱ類の花文様について各段階に新しく見られるもの、及び、それらと型式学的に比べられるものを、各段階ごとに示したものである (花文様の方向は横向きに統一し、Ⅱ類の花文様の茎の下部は省略した)。

第1段階の戦車文クラテルには、花卉、がく、めしべが各々区別出来る花文様は見られない。図4—1, 2に示した扇状の文様 (以下、図4に示した文様を、各々の文様の番号を括弧でかこって表わすことにする) は、二枚貝文 (FM25)、或いは、バビルス文 (FM11) として分類されているものである。しかし、この文様は形態的にも、馬の腹下と背上に描かれる点からも、めしべを持つⅠ類の花文様との関係が注意され、むしろ花文様的一种とした方が良いかも知れない。第1段階の戦車文クラテルには、(1)と共に(2)が描かれる例が見られる。第2段階の戦車文クラテルには新しく、(3)、(4)、(5)が見られる。(6)と(7)は、短線が重ねられた帯状の文様が描かれ、器形的にも第2段階の戦車文クラテルと比べられるクラテルに描かれたものである。(8)~(11)は、第3段階の戦車文クラテルに描かれたものである。(12)は、めしべの基部の表現で(11)と比べられるが、(10)と(13)と共に、杯が深く脚部が低い、古い段階の器形的特徴を持つ Kylix に描かれたものである。(14)は、柱頭が、がくに付いている点で(13)と比べられるが、(8)と比べられる(15)と共に、3把手付壺に描かれたものである。(14)と(15)はⅡ類の花文様であるが、並べて描かれた両者の間には、円花文が入れられており、この点でも、第3段階の戦車文クラテルの文様表現と比べられる。(16)~(21)は、第4段階の戦車文クラテルに描かれたものである。(22)は French が LHⅢA₂ 期の後半としたミュケナイの堆積中の土器片に見られるものである (French, 1965, p. 180, Fig. 7: 1参照)。この例の様な、花卉まで伸びた、芯部だけのめしべを持つ花文様は、ミュケナイの LHⅢB 期の堆積中に全く見られない。(23)と(25)は、(22)と同じめしべを持つ例で、(23)は、めしべ全部が省略された点で(21)と比べられる(24)と共に、

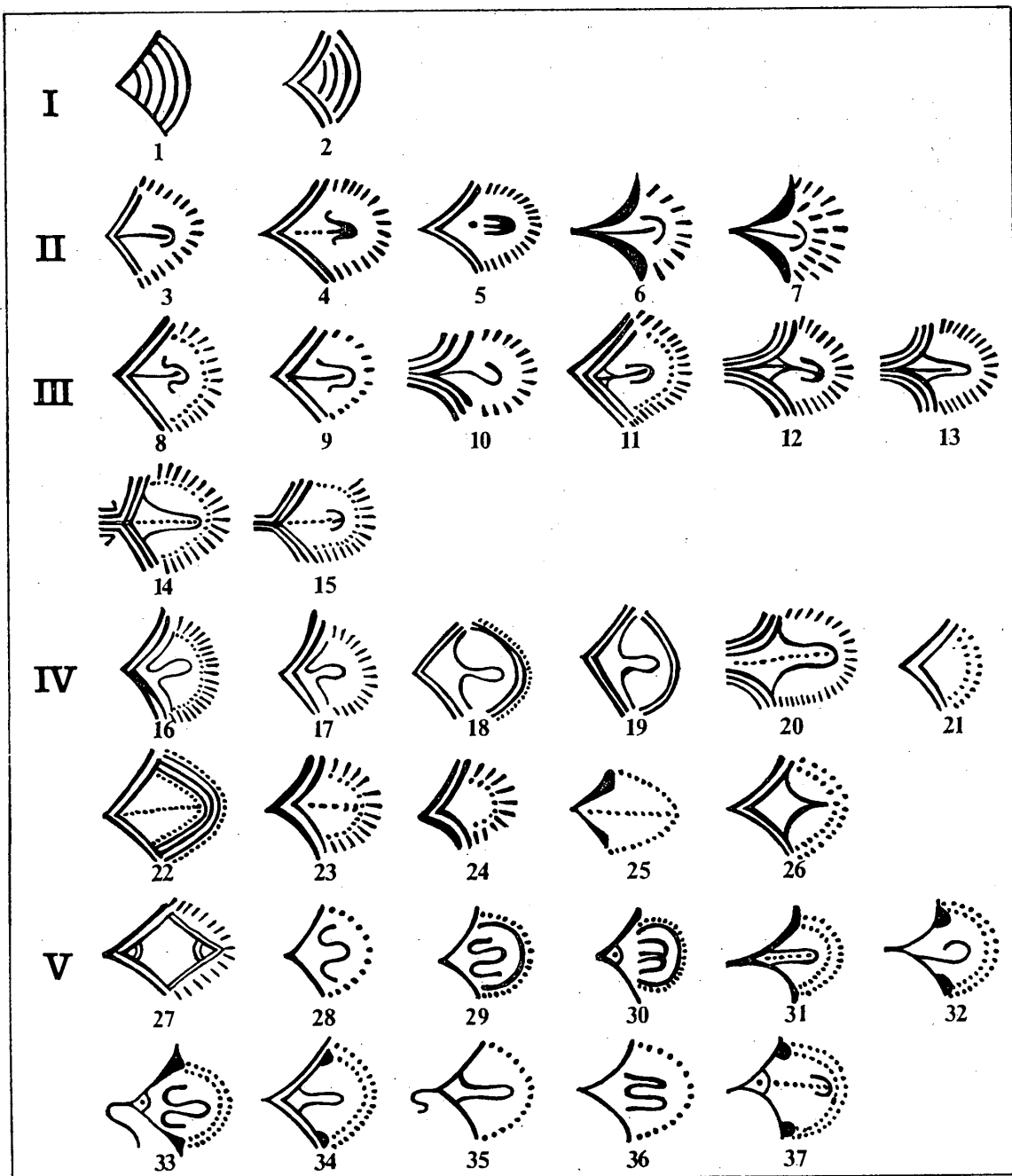


図4 戦車文クラテル各段階の花文様の表現

- | | |
|---|--|
| 1. Immerwahr, 1945, p. 545, Fig. 8, 9, p. 546, Fig. 10. cf. Stubbings, 1951, p. 34, Fig. 6. | 20. Karageorghis, 1977, p. 518, Fig. 13c, p. 519, Fig. 14. |
| 1, 2. Catling, 1965, Pl. 58 : 4. | 21. Sjöqvist, 1940, Fig. 19 : 3. |
| 3. Karageorghis, 1965, Pl. 1 : 2. | 22. French, 1965, Pl. 52a |
| 4, 5. Biran, 1970, p. 93, Fig. 1 | 23, 24. Forsdyke, 1925, p. 182, Fig. 225 = A 986 |
| 6, 7. Karageorghis, 1963, Pl. 1 : 1, 2, 3. | 25. Karageorghis, 1965, Pl. 18 : 6 |
| 8~10. Ibid, Pl. 7 : 1, 2, 3. | 26. CVA Denmark, Pl. 57 : 8 |
| 11. Ibid, Pl. 8 : 5. | 27. Lacy, 1967, p. 212, Fig. 85b. |
| 12, 13. CVA Tchécoslovaquie I, Pl. 5 : 5 | 28~32. Karageorghis, 1963, Pl. 5 : 1 |
| 14, 15. Forsdyke, 1925, Pl. XI A. 831 | 33. Papadopoulos, 1970, Pl. 50b |
| 16, 17. Sjöqvist, 1940, Fig. 20 : 1 | 34~36. French, 1967, p. 160, Fig. 10 : 13, 4, 1. |
| 18, 19. Karageorghis 1977, p. 733, Fig. 54b | 37. Schaeffer, 1949, Fig. 64 : 9 |

エジプトの Gurob 出土の鍔壺に描かれたものである。(26)は、柱頭の両端が、がくの先端部に付いている点で、(20)と比べられるものである。この花文様が描かれた土器は、器高の高いタイプの鍔壺であるが、器形的にも、後述する様な LH III B 期の特徴は持たず、LH III A₂ 1 期に位置づけられているものである。(27)は、第 5 段階の戦車文クラテルに描かれた筆者の知る限り唯一の例である。(28)~(32)は、IV 類の花文様を中心に左右に二頭の牛が向い合う図が描かれたキプロス島出土のクラテルに描かれたもので、この段階に充填文として I 類の花文様が用いられたもう一つの例である。(33)は、鍔壺の肩部に描かれたものであるが、がくとめしべの形態の点で、このクラテルに描かれた花文様と比べられる。この鍔壺の胴部には V 類の花文様の茎に見られる文様(図 3—V 左参照)が文様帯として入れられている。(34)~(36)は、ミュケナイの LH III B 期の堆積出土の鍔壺に描かれたものである。(37)は、がくの形態の点で(30)、(32)、(33)、(34)と比べられるものであり、描かれた鍔壺の胴部には、V 類の花文様の茎に見られる S 字状入組文(図版 7—4 参照)が文様帯として描かれている。

花文様の起源の問題は別にして、戦車文クラテル各段階ごとの花文様の変遷を考察すれば、めしべを持つ花文様は、第 2 段階になって出現したものと思われ、この段階には既に、点線、或いは、一点で表わされる芯部が見られる⁹⁾。第 2 段階までの花卉の表現には、点線が組合わされた例は見られないが、第 3 段階には、短線と点線、又は点線だけによる花卉が現われ、がくの両端をアーチ状に結ぶ実線に点線が組合わされた花卉も見られる(図版 3—I 参照)。めしべは、この段階になると、柱頭が大形化してがくに付くものが出現し、これに影響されて、(11)、(12)に見られる様なめしべも出現したと思われる。又、Furumark が LH III B 期の出現とした鉤状のめしべも、この段階に既に見られる。Furumark は、又、この鉤状のめしべと同じ土器に共存する、柱頭が矢印状のめしべの例(図 3—II 左)を示し、このめしべも LH III B 期の出現としている。しかし、第 3 段階と考えられる(10)、(11)、(12)の花文様が描かれている先述の Kylix と同形で、文様の配置も類似している Kylix に、矢印状の柱頭を持つ花文様(図 3—III 左)が見られるので、このめしべも鉤状のめしべと同じく第 3 段階に出現したと考えられる。(10)、(11)、(12)の花文様が描かれている Kylix には又、VII 類の花文様(図 3—VII)が描かれているが、これは、ミュケナイの LH III A₂ 1 期の堆積中の土器に見られる同じ VII 類の花文様より型式学的にやや古いものと思われる⁹⁾。第 4 段階には、点線で描かれた花卉が普通に見られ、めしべは、Furumark が LH III B 期の出現とした、がくと柱頭が一筆で描かれるもの¹⁰⁾を始め、柱頭が省略されるもの、芯部が省略されるもの、又、めしべ全部が省略される例など、第 3 段階のめしべより一段と便化したものが I 類の花文様に見られる。この段階に見られる両端をがくの先端に付けて描かれる柱頭は、前段階の(13)、(14)のめしべからの発展と思われ、中でも(26)に見られる柱頭は、上述した様に、第 3 段階に出現したと考えられる矢印状の柱頭の発展したものと考えられる。第 5 段階の(27)は、(26)の更に発展したものと見る事が出来、その菱形の部分は V 類の花文様の茎に同じ表現が見られる(図 3—V 右、参照)。(28)、(29)、(33)に見られるめしべは、単に芯部が省略されたものというよりは、むしろ前段階の(16)~(19)に見られる、がくと柱頭が一筆で表わされるものの更に便化した形と見る事が出来よう。(36)に見られる様なこのめしべの反転

した形のめしべもこの段階になって始めて出現する。③0に見られるめしべは、Ⅳ類の花文様に認められるめしべ（図3—Ⅳ参照）と比較される。がくも、この段階には二重線によるものが少なくなり、便化しているが、先端部だけに膨らみを持つがくは、前段階の②9に見られる様なものから発展したものと思われる。この様ながくと共に、Ⅴ類の花文様の茎に同様の表現が見られる③0、③3、③7のがくの基部の表現も、第5段階になって出現した新しいものと考えられる（図3—Ⅴ左、参照）。

以上見た様に、花文様は各段階ごとに変化に富んだ変遷を示し、ミュケナイ式土器の詳細な編年の為の指標として今迄以上に重要視されて良いものと思われる。しかし、注意されることは、第5段階の花文様の例からも明らかな様に、花文様各部の新しい要素が出現しても古い要素が消滅してしまうものではないことである。この為、例えば③4と類似するが、がくの先端部に膨らみを持たない花文様の場合は各部分の形態だけからその編年上の位置を決定することは難しい。この様な場合、鐙壺の肩部に描かれる例については、後述する肩部画面に於ける花文様の配置法も、別の指標として重要と思われる。

六 LHⅢA₂l 期とLHⅢB期の鐙壺の区別の問題

戦車文クラテルの各段階を、現在一般に用いられているLHⅢ期の時期区分に対応させれば、第1、第2段階がLHⅢA₂e期迄に、第3、第4段階がLHⅢA₂l期に、第5段階はLHⅢB期に大体相当する。

小論の関心はLHⅢA₂l期とLHⅢB期の区分とその境界の年代の問題であり、言い換えれば、第4段階と第5段階の区分とその境界の年代の問題である。以下ではこの問題にとって特に関係のある第4段階と第5段階の鐙壺の型式学的規準の問題について、花文様の変遷について考察した結果を加えて、検討したい。

先に見た第4段階と第5段階の花文様の区別は、両段階の鐙壺を区別する一つの指標として考えられるが、FurumarkがLHⅢB期に位置づけた、がくと柱頭が一筆で描かれるめしべを持った花文様が、既に第4段階に出現していたと考えられる点に特に注意したい。一方、Furumarkが同じくLHⅢB期の出現とした、斜め下向きに描かれた花文様の花卉の下半分を画面を区切る帯上に付け、鉤状のめしべを持つ幾何学的な花文様（図版7—1、2、6参照）は、ミュケナイのLHⅢA₂l期の堆積には全く見られず、又、Zigouries Kylixと共伴して出土する土器に見られることから、先に見た第5段階の花文様と共に、第5段階になって出現したものと考えられる。

第4段階と第5段階の花文様を、鐙壺の肩部画面に於ける配置法について比較して見ると、第5段階の花文様は、斜め下向きか横向きが多く、第4段階の花文様は斜め上向きが多い。把手で2分された肩部画面のうち注口の両側に描かれた花文様を見ると、第5段階の花文様は同じ回転方向に描かれているのに対し、第4段階の花文様では、同じ回転方向に描かれる例は、筆者の知る限り見られず、逆向きか向い合わせに描かれている。

次に、鐙壺の肩部画面の下を区切る、太線と細線による横帯と、その下の同じ横帯との間の空間

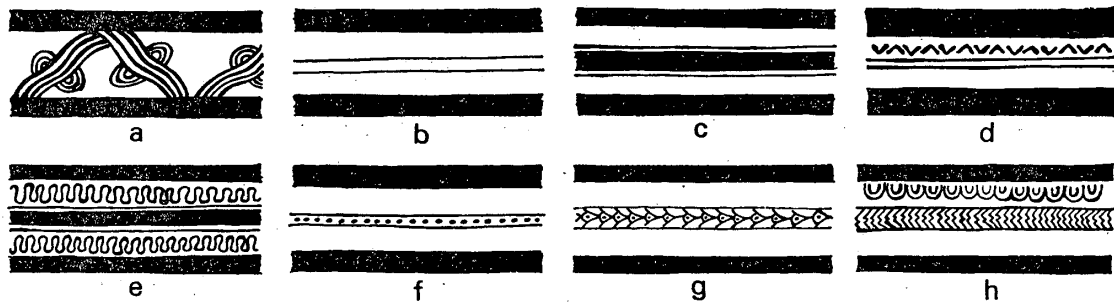


図5 中間部の装飾法の分類

- | | |
|-------------------------------------|--|
| a. Forsdyke, 1925, Pl. XII, A. 894. | e. Karageorghis, 1963, Pl. 20 : 6. |
| b. Ibid., p. 162, Fig. 214=A. 895. | f. Symeonoglou, 1973, Pl. 33, Fig. 92. |
| c. CVA Denmark, Pl. 57 : 8. | g. French, 1967, p. 161, Fig. 11 : 3. |
| d. Ibid, Pl. 58 : 10. | h. French, 1966, p. 298, Fig. 1 : 11. |

(以下中間部と呼ぶ)の装飾について検討したい。中間部の装飾は、LHⅢB期に盛行するとされ、el-Amaruna 出土の、装飾された中間部を持つ鍔壺がLHⅢB期の上限の年代を引上げる一つの論拠とされたのであるが、その装飾法にも幾つかのヴァリエーションが認められる。ここでは装飾された中間部を次のaからhまで8類に分類して見ていくことにする。(図5参照)

- a 中間部全体が文様帯とされるもの。
- b 1乃至数本の横線による帯が入れられるもの。
- c 上下が1本の細線で挟まれた太線が入られるもの。
- d bの中間部の区切られた空間が別の文様帯とされるもの。
- e cの中間部の区切られた空間が別の文様帯とされるもの。
- f 簡単な装飾が加えられた2本線による幅の狭い帯が入られるもの。
- g fより幅の太い、Ⅳ～Ⅵ類の花文様の茎の表現と比べられる文様帯が入られるもの。
- h gの中間部の区切られた空間が別の文様帯とされるもの。

これらのうち、第5段階の花文様と共存する例は、cとeを除き全てに見られるが、そのうち、型式学的に新しいものと考えられるgとhは、ミュケナイで発見されたLHⅢA₂期の堆積出土の鍔壺には見られず、明らかに第5段階になって出現したものと考えられる。しかし、a、b、eは、ミュケナイのLHⅢA₂期の堆積出土の鍔壺に見られ(French, 1965, Pl. 54, 1, 3, 4, 7 参照)、又、a～fは、第4段階までの花文様と、同じ鍔壺に共存する例が普通に見られる。この様に、装飾された中間部のうち、恐らくgとh以外は全て第4段階に既に出現していたと思われるのである。

他に、鍔壺の肩部画面下を区切る横帯の太線上に白色塗料で文様を加えられ、この太線が文様帯とされる例も注意される。この技法による文様帯は、知られる限り、第5段階になって出現したと考えられる花文様や中間部の装飾と共存する例がなく、又、ミュケナイのLHⅢB期の堆積出土の鍔壺にも見られない。しかし、形態と配置法から第4段階に位置づけられる花文様と共存する例(Symeonoglou, 1973, Pl. 43, Fig. 134, 135=図版6-2, Pl. 44, Fig. 136, 137, 140, 141 参照)

があることから見て、白色塗料で描かれた文様帯は、第4段階の鑑壺の別の一つの指標と考えて良いかも知れない。

次に、第4段階と第5段階の鑑壺の器形上の区別の問題を、Furumark が器高の高いものとして分類した鑑壺について検討したい。胴下部から底部にかけての形態を見ると、円盤状に横に張り出す発達した底部の形態は、程度の差はあるがミュケナイのLHⅢB期の堆積出土の鑑壺や第5段階の花文様が描かれる鑑壺に見られる(図版7-1, 5, 6, 7参照)。一方、これに対し、底部の発達の弱いものや脚部から底部まで裾広がりになる形態は、第4段階の花文様が描かれる鑑壺に例が見られる(図版6-1, 2)が、ミュケナイのLHⅢB期の堆積中の鑑壺や第5段階の花文様が描かれた鑑壺には見られないので、第5段階には消滅した形態と考えて良いだろう。

器高の高い鑑壺の胴下部から肩部にかけての形態を見ると、第4段階の花文様が描かれるものに、肩部高が低く、その膨らみも弱く、最大径部の丸みも少ない、全体として直線的なプロフィールを持つものが見られることが注意される。このような形態を持つロードス島のSkopi出土例(図版6-1)は、脚部から底部にかけて裾広がりの形態を呈し、肩部花文様は、第5段階の花文様には見られない配置で描かれている。この鑑壺は、形態的にミュケナイのLHⅢA₂期の堆積出土の鑑壺と比べられており(Åström, et al, 1980, p. 53)又、第4段階の花文様が描かれたThebes出土の鑑壺(図版6-2)も、器高のやや低い点を除けば、この鑑壺と同じ器形的特徴を持っている。又、Enkomi出土の3把手付水差(図版6-6)は、脚部以下の裾広がりの形態、白色塗料による文様帯、めしべが省略された花文様などから第4段階に位置づけられると思われるが、脚部以上のプロフィールは直線的である。

この様に、器高の高い鑑壺に於いては、明らかに第4段階に、直線的なプロフィールを示すFurumarkの言うConicalな器形が認められ、Furumarkも器高の高い鑑壺についてはこのような器形をLHⅢA₂期に認めている(MP p. 25)。しかし器高のそれ程低くないConicalな器形の鑑壺(F S 182)と器高の低いConicalな器形の鑑壺(F S 183)については、Furumarkは、これらを各々、彼がLHⅢB期とした、器高の高い鑑壺(F S 167)と器高の低い鑑壺(F S 180)と比較し、LHⅢB期に位置づけているのである(MP p. 45)。FurumarkのF S 182とF S 183の鑑壺をLHⅢB期に位置づける議論は、しかし、十分な説得力を持つものとは思われない。まず、F S 182とF S 167の比較については、Furumarkがtorus discと呼ぶ底部の形態の点で比較されているが、同様な底部は、LHⅢA₂期の器高の高い鑑壺(F S 166)にも、Furumark自身によって認められている(MP p. 611)。又、肩部の形態の比較でも、F S 182の中でも肩部の膨らみの比較的強いものが取上げられてF S 167と比較されている(MP p. 45)が、比較されるべきF S 182の肩部の形態は、Conicalと規定される以上、肩部の膨らみの弱いものでなければならないはずである。F S 182の肩部には第5段階の花文様が見られ、この器形がLHⅢB期に盛行したことは確かではある。しかし、F S 182と器形の点で比較されるべき器高の高い鑑壺は、第4段階に位置づけられる先述のSkopi出土例やThebes出土例であり、又、F S 182に描かれる花文様には形態と配置

から第4段階に位置づけられるものも見られる(図4—25; 図版6—3参照)のであるから, F S 182が, 第4段階に既に出現していたことは充分考えられるのである。

F S 183は, 器高の低い鑑壺の中でも, 肩部高が低く, 肩部の膨らみが殆んど見られず, 最大径部の位置が胴高の中間より上に位置するという器形的特徴を持つF S 180の鑑壺と比較されたが(MP p. 45), 肩部の形態から両者を第5段階に限ることは, F S 182についてと同じく困難である。更に, 白色塗料による文様帯を持つF S 183の例(図版6—7)も見られる。F S 180についても, 第4段階と考えられる例の花文様と比べられる, 図版6—4に見られる肩部花文様と殆んど同じ花文様が描かれる例(Morricone, 1967, p. 252, Fig. 277)が見られる。又, この例の中間部の装飾は, 図版6—4に見られるものとほぼ同じである。これらの例から, F S 183とF S 180についてもF S 182と同じく, 既に第4段階に出現していた可能性が考えられるのである。

第4段階と第5段階の鑑壺を器形から区別することは難しく, 文様からも, 肩部に花文様を持つものとその他一部の鑑壺以外は, 両者の区別は難しい。しかし, ここで重要なことは, FurumarkがL H III B期に位置づけた鑑壺の幾つかの器形グループが, 恐らく Zigouries Kylix の出現以前に現われていたという点である。何故ならば, このことは従来のL H III A₂ I期とL H III B期の境界の年代についての議論に関係してくると考えられるからである。以下, この点から両時期の境界の実年代の問題を再検討し, 小論の結語に代えたい。

八 L H III B期上限の年代について

現在, L H III B期の上限年代について約70年の開きが学者間に見られることは先に触れた通りである。Furumark は, この年代を前1300年頃としたが(CMP p. 114), これに対して, Wace は, この年代を50年程引上げることを試みた(Wace, 1953, p. 15, n. 22, 1957, pp. 220—3)。一方, Symeonoglou は, Furumark の年代より20年新しい年代を提唱している(Symeonoglou, 1970, pp. 287—8)¹¹⁾。更に, 近年, イギリスの V. Hankey と P. Warren が, Wace と同様, 古い年代を提唱し(Hankey, 1973, pp. 128—36; Hankey & Warren, 1974, p. 150), 以来, 筆者の知る限り, これに対する説は出されておらず, 現在は, L H III B期の上限を前1350年頃まで引上げる説が有力の様である(Simpson, 1965, p. 4; Papadopoulos, 1978—79, p. 185参照)。

まず Furumark の説について見ると, 彼は, Petrie によって Seti I 世(前1318—前1304, Hayes による)の時代とされたエジプトの Gurob 23号墓内の Res の棺から発見された鑑壺(Petrie, 1890b, p. 39, Pl. 28: 1)をL H III A₂ I期のものと認め, L H III B期への移行は, 前1300年頃に確実に位置づけられるとした。

Wace はこれに対し, L H III B期のミュケナイ式土器の出土数の多さから¹²⁾, Furumark がL H III A₂ I期に与えた75年間は, L H III B期に与えられた70年間に比べて長過ぎると考えた。彼は, Furumark 自身がL H III B期としている鑑壺が, Amenophis III世(前1417—前1379, Hayes による)のカルトゥーシュを持つ製品と共に, Gurob の住居址内の床下から発見された一括遺物中に

見られること (Petrie, 1891, pp. 16—7, Pl. XVII), 又, Gurob の別の住居址内の床下から発見された一括遺物中にも Tutankhamun の名を持つペンダントと共に見られること (Petrie, 1891, p. 17, Pl. XVII) を取り上げ, LH III B 期のミュケナイ式土器は Tutankhamun の在位中 (前1361—前1352, Hayes による; 前1351/45—前1342/36, Hornung による) に出現していたと論じ, Gurob 23号墓出土の鍔壺は伝世品と考えたのである (Wace, 1975, p. 222)。

Wace の LH III B 期の上限年代を引上げるこの試みには, しかし, 幾つかの問題点が指摘出来る。まず, Amenophis III 世のカルトゥーシュを持つ製品と LH III B 期の鍔壺との同時期性の問題については全く触れられないまま否定されている一方, Tutankhamun の名を持つペンダントと LH III B 期の鍔壺との同時期性は疑われていないのである。しかし, Tutankhamun の時代の製品と LH III B 期のミュケナイ式土器が共伴した例は, 他に知られていないのであり, 又, Petrie の記述には, この Tutankhamun の名を持つペンダントと Furumark により LH III B 期とされた鍔壺が共伴したことが明記されていない点も注意される¹³⁾。又, 確かにこの鍔壺が Tutankhamun の銘を持つペンダントと共伴し, 両者の同時期性が認められたとしても, これをもって Wace の言う様に LH III B 期のミュケナイ式土器が Tutankhamun の時代に既に出現していたと言えるだろうか。肩部の膨らみが弱く, 器高の低い, この鍔壺の器形は, 先述した様に, 既に第4段階に出現していた可能性があり, 肩部に描かれた円花文は, Furumark も LH III A₂ 期にその出現を認めているのである (MP p. 317)。

Wace と同じく, 前1350年頃まで LH III B 期の上限年代を引上げる, 近年発表された V. Hankey と P. Warren の説は, el-Amarna 出土の LH III B 期とされた2点の鍔壺をその主な論拠としている。1点は, カイロ博物館所蔵 (66742) の, “王の彫像の家” と呼ばれた住居址出土の完形品で (Pendlebury, et al, 1951, p. 141, Pl. 78 : 9), 器高と最大径がほぼ等しく, 肩部画面がU字文で埋められ, 中間部が矢羽状文で装飾されている。Hankey は, この中間部の装飾を強調するが, これは, 先に分類した中間部の装飾法の a に分類されるもので, 矢羽状文で装飾された a 類の中間部装飾は, 第4段階の特徴と思われる脚部から底部にかけて裾広がり形態を示す器高の高い鍔壺 (Karageorghis, 1965, Pl. 27 : 1, 2) に見られるのである¹⁴⁾。又, 肩部のU字文についても, ミュケナイの LH III A₂ 期の堆積出土の鍔壺に, 類例が見られる (French, 1965, p. 163, Fig. 1:8)。別の1点は, ロンドン大学 Petrie コレクション中の, flat-topped と形容され, F S 182 に分類された鍔壺の土器片 (UCL PC 725+742) であり, Tutankhamun 以降に位置づけられる遺物を含まない宮殿のごみ捨て場の堆積中から発見されたものとされる (Hankey, & Warren, 1974, p. 148)。この鍔壺については, 先に述べた様に, F S 182 の器形は第4段階に出現していた可能性が考えられる為, 器形から LH III B 期以降に確実に位置づけることは出来ない。文様を見ると, Multiple stem (FM19) と呼ばれる肩部に描かれた文様は, LH III A₂ 期にも普通に見られるものであり, 中間部に入れられた波線は, 第4段階に位置づけられる Thebes 出土の鍔壺の中間部に同様の例が見られる (図版6—2参照)。この様に, el-Amarna 出土のこれら2点の鍔壺には, 明らか

に第5段階に位置づけられねばならない文様の特徴は見られず、これらはむしろ第4段階の鐙壺と比べられるものである。

ここで再び、先に第4段階の戦車文クラテルに描かれた花文様と比較された23, 24の花文様を持つ鐙壺について、その出土状況を検討すれば、この鐙壺は、Petrie が第19王朝初期に位置づけた木製の彫刻された盆と共伴して Gurob の住居址から出土したとされている (Petrie, 1890b, p. 42, Pl. XXVIII : 7)。又、この鐙壺と類似するという鐙壺が、Petrie が同じく第19王朝の初期のものとした木製のウシャブティと共に、Kahun で発見された埋葬に副葬されていた (Ibid, p. 32)。Petrie による木製の盆とウシャブティの年代が正しく、これらと共伴した鐙壺が、これらと同時期のものであれば、Tutankhamun の時代には出現していた第4段階の鐙壺は、少なくとも前1300年頃までは存続したと考えられるのである。

以上見た様に、現在、確実に第5段階に位置づけられる鐙壺の年代を前1300年以前とする証拠はなく、一方、第4段階の鐙壺が前1300年頃まで存続した可能性も否定出来ない。そこで、戦車文クラテルの第5段階に位置づけられる Zigouries Kylix の出現をもって L H III B期の開始とするならば、L H III B期の上限の年代を近年提唱されている様に前1350年頃まで引上げることは難しいと思われるのである (p. 261, Note 参照)。

註

- 1) Furtwangler, A und Loeschcke, G, *Mykenische Vasen*, Berlin, 1886. 筆者未見。第Ⅰ様式から第Ⅳ様式まで分類されたが、第Ⅳ様式のみが編年上有効で、現在の分類ではLHⅢCに相当する (Forsdike, 1925, p. xlii, n. 4 参照)。
- 2) Furumark は時期区分の用語として Mycenaean を用いるが、本論文では Late Helladic に統一する。
- 3) Thebes の宮殿址と考えられている住居址で発掘された甕壺について、報告者の Symeonoglou は、これらをFS 166 としてLHⅢA₂期に位置づけたが、Raison は、これらをFS 182としてLHⅢB期に位置づけている (Symeonoglou, 1973, p. 25; Raison, 1977, p. 84, n. 6)。
- 4) LHⅢA₂期とされたFM18C : 80, 81とLHⅢB期とされたFM18C : 117, 120は、がくの太さ以外の点では殆んど同じであり、又、LHⅢB期とされたFM18C : 109の各部分は、全て、LHⅢA₂期の花文様にも認められる。
- 5) キプロス博物館所蔵の Enkomi 10号墓出土 (No. 200) のクラテルには充填文的性格の強い積石文と共に幾何学的充填文が描かれている (Buchholz & Karageorghis, 1973, p. 435, 1620参照)。
- 6) 低い頸部を持つクラテルの口唇部は横に張り出している。
- 7) Furumark によってLHⅢB期に位置づけられた (MP p. 593) Enkomi 11号墓出土例は、高い頸部と縦向きの巻貝文様から見て、Georghiades 氏所蔵のクラテルよりやや新しい時期のものかも知れない。しかし、第5段階の型式学的特徴は認められない。
- 8) これらのめしべは若干便化したものと見られるが、既に、クノッソス新宮殿崩壊前の堆積出土の土器に描かれている (Popham, 1970, p. 97, Fig. 3 : 9, p. 102, Fig. 8 : 3参照)。
- 9) ミュケナイのLHⅢA₂期の堆積出土の土器に見られるものは、花卉の基部に、目玉の表現と同じ一對の同心円が入れられる為、図3の例より植物文の性格が更に薄れ、V, VI類の性格に近づいている (French, 1965, p. 165, Fig. 2 : 5, 8参照)。
- 10) ミュケナイのLHⅢA₂期の堆積出土の甕壺にも、このめしべを持つ例が見られる (French, 1965, p. 177)。
- 11) Symeonoglou の年代は、el-Amarna 出土のミュケナイ式土器を、Furumark に従ってLHⅢA₂期のうちの前半とし、これを前1360年頃とし、又、LHⅢB期の終末を、Desborough と Blegen に従って前1200年頃とし、この約160年の期間を2分してLHⅢA₂期の後半とLHⅢB期にそれぞれ80年をあてるという方法で出されたものと思われる。
- 12) Wace は、ミュケナイの“Petsas の家”と呼ばれる住居址出土の土器群をLHⅢB期に位置づけているが、French はこれをLHⅢA₂期に位置づけている (French, 1965, pp. 171—4; Wace, 1957, p. 221)。
- 13) この住居址床下の一括遺物を示す図中にも、この甕壺は示されていない (Petrie, 1891, Pl. XVII 参照)。
- 14) この甕壺と同じ器形的特徴を持つ甕壺には、肩部にU字文が描かれる例 (Karageorghis 1965, Pl. 27 : 3, 4) も見られる。

略 語

- AJA : American Journal of Archaeology.
 ASAtene : Annuario della Scuola Archeologica di Atene.
 BCH : Bulletin de Correspondance Hellénique.
 BICS : Bulletin of the Institute of Classical Studies, University of London.
 BSA : Annual of the British School at Athens.
 CMP : A. Furumark, The Chronology of Mycenaean Pottery, 1941.
 CVA : Corpus Vasorum Antiquorum.
 FM : Furumark Motif Number.
 FS : Furumark Shape Number.
 JHS : Journal of Hellenic Studies.

MP : A. Furumark, *The Mycenaean Pottery, Analysis and Classification*, 1941.

RA : *Revue Archéologique*.

RDAC : Report of the Department of Antiquities, Cyprus.

Bibliography

Biran, A.

1970 "A Mycenaean Charioteer Vase from Tel Dan", *Israel Exploration Journal* 20 pp.92—5.

Blegen, C. W.

1928 *Zigouries*. Cambridge.

1951 "Preclassical Greece—A Survey", *BSA* 46 pp.16—24, especially p.23.

Buchholtz, H. G., and Karageorghis, V.

1973 *Prehistoric Greece and Cyprus*. London.

Catling, H. W. & Millet, A.

1965 "A Study in the Composition Patterns of Mycenaean Pictorial Pottery from Cyprus", *BSA* 60 pp. 212—24.

Evans, A.

1935 *The Palace of Minos at Knossos*, Vol.IV. London.

Forsdyke, E. J.

1925 *Catalogue of the Greek and Etruscan Vases in the British Museum*, Vol.i ; Part I : Prehistoric Aegean Pottery.

French, E.

1963 "Pottery Groups from Mycenae : A Survey", *BSA* 58 pp.44—52.

1964 "Late Helladic IIIA₁ Pottery from Mycenae", *BSA* 59 pp.241—61.

1965 "Late Helladic IIIA₂ Pottery from Mycenae", *BSA* 60 pp.159—202.

1966 "A Group of Late Helladic IIIB₁ Pottery from Mycenae", *BSA* 61 pp.216—38.

1967 "Pottery from Late Helladic IIIB₁ Destruction Context at Mycenae", *BSA* 62 pp.149—93.

1977 "Mycenaean Problems 1400—1200 BC", *BICS* 24 pp.136—7.

Furumark, A.

1941a *The Mycenaean Pottery, Analysis and Classification*. Stockholm.

1941b *The Chronology of Mycenaean Pottery*. Stockholm.

Hankey, V.

1973 "The Aegean Deposit at El Amarna", in *The Mycenaeans in the Eastern Mediterranean* pp. 128—36.

Hankey, V. and Warren, P. M.

1974 "The Absolute Chronology of the Aegean Late Bronze Age", *BICS* 21 pp.142—52.

Hooker, J. T.

1977 *Mycenaean Greece*. London.

Immerwahr, S. A.

1945 "Three Mycenaean Vases from Cyprus in the Metropolitan Museum of Art", *AJA* 49 pp.534—56.

Johnson, J.

1980 "Maroni de Chypre", *Studies in Mediterranean Archaeology* Vol.59.

Karageorghis, V.

1957 "The Mycenaean 'Window-Crater' in the British Museum", *JHS* 77 pp.269—71.

1960 "Fouilles de Kition 1959", *BCH* 84 pp. 504—88.

1968 *Cyprus*

1977 "Chronique des Fouille à Chypre en 1976, Collection A. Georgiadès", *BCH* 101 pp. 732—3.

- Lacy, A. D.
1967 *Greek Pottery in the Bronze Age*.
- Mackeprang, M. B.
1938 "Late Mycenaean Vases", *AJA* 42 pp.537—59.
- Morricone, L.
1967 "Eleona e Langada : Sepolcreti della Tarda Etá del Bronzo a Co", *ASAtene* 43—44, pp.5—312.
- Mountjoy, P. A.
1976 "Late Helladic IIIB₁ Pottery Dating the Construction of the South House at Mycenae", *BSA* 71 pp.79—111.
- Papadopoulos, A. J.
1976 "Excavations at Aigion. 1970" *Studies in Mediterranean Archaeology* Vol. 46.
- Papadopoulos, T. J.
1978—79 "Mycenaean Achaea", *Studies in Mediterranean Archaeology* Vol.55.
- Pendlebury, J. D. S. et al.
1951 *The City of Akhnaten*, Part iii. London.
- Petrie, W. M. F.
1890a "The Egyptian Bases of Greek History", *JHS* 11 pp.271—7.
1890b *Kahun, Gurob, and Hawara*. London.
1891 *Illahun, Kahun and Gurob*. 1889—90. London.
1894 *Tell el-Amarna*. London.
- Popham, M. R.
1970 "The Destruction of the Palace at Knossos : Pottery of the Late Minoan III Period", *Studies in Mediterranean Archaeology* Vol.12.
- Raison, J.
1977 "La Cadmée, Knossos et le Linéaire B", *RA* pp.79—86.
- Robinson, D. M. et al.
1930 *A catalogue of the Greek Vases in the Royal Ontario Museum of Archaeology Toronto*. Toronto.
- Schaeffer, C. F. A. et al.
1949 *Ugaritica*, 2. Paris.
1961 "Resumé des Resultats de la XXIII^e Campagne de Fouilles à Ras Shamra-Ugarit", *Les Annales Archéologiques de Syrie* 11—12 pp.187—203.
- Simpson, R. H.
1965 "A Gazetteer and Atlas of Mycenaean Sites", *BICS Supplement* 16.
- Sjöqvist, E.
1940 *Problems of the Late Cypriot Bronze Age*. Stockholm.
- Stubbings, F. H.
1951 *Mycenaean Pottery from the Levant*. Cambridge.
1975 "The Expansion of the Mycenaean Civilization", *Cambridge Ancient History*, 3rd ed. Vol.II ; Part 2 : Chapter XXII(a) pp.165—87.
- Symeonoglou, S.
1970 "A Chart of Mycenaean and Late Minoan Pottery", *AJA* pp.287—8.
1973 "Kadmeia, I", *Studies in Mediterranean Archaeology* Vol.35.
- Taylor, Lord W. D.
1958 *Mycenaean Pottery in Italy and Adjacent Areas*. Cambridge.
- Vermeule, E.
1964 *Greece in the Bronze Age*. Chicago.

- Vermeule, E. & Karageorghis, V.
 1982 *Mycenaean Pictorial Vase Painting*. Cambridge and London.
- Wace, A. J. B.
 1932 "Chamber Tombs at Mycenae", *Arcaeologia* 82.
 1953 "The History of Greece in the Third and Second Milleniums BC", *Historia* 2 pp.74—94.
 1957 "The Chronology of Late Helladic IIIB", *BSA* 52 pp.220—3.
- Wace, A. J. B. et al.
 1921 "Excavation at Mycenae", *BSA* 25 pp.1—434.
- Wace, A. J. B. & Blegen, C. W.
 1916 "The pre-Mycenaean pottery of the Mainland", *BSA* 22 pp. 175—89.
- Wardle, K. A.
 1969 "A group of Late Helladic IIIB₁ Pottery from within the Citadel at Mycenae", *BSA* 64 pp. 261—97.
 1973 "A group of Late Helladic IIIB₂ Pottery within the Citadel at Mycenae 'Causeway deposit', *BSA* 68 pp.297—342.
- Weinberg, S. S.
 1949 "Investigations at Corinth, 1947—1948" *Hesperia* 18 pp.148—57.

Addenda

- Åström, P. et al.
 1980 CVA Sweden Fascicule 1.
- Bazant, J. et al.
 1978 CVA Tchecoslovaquie Fascicule 1.
- Blinkenberg, C. & Johansen, K. F.
 不明 CVA Denmark Fascicule 1.
 不明 CVA Denmark Fascicule 2.
- Canciani, F.
 1966 CVA Deutschland Band 27.
- Kaiser, B.
 1976 CVA Deutschland Band 40.
- Karageorghis, V.
 1963 CVA Cyprus Fascicule 1.
 1965 CVA Cyprus Fascicule 2.
- Smith, A. H.
 1925 CVA Great Britain Fascicule 1.
- Smith, A. H. & Pryce, F. N.
 1926 CVA Great Britain Fascicule 2.

Dating the Beginning of Late Helladic IIIB

—A typological study on the stirrup jar of the age of Mycenaean expansion—

Michimasa Doi

To understand the process of the expansion of Late Helladic (Mycenaean) culture, it is essential to establish a precise chronology on the basis of a study of the pottery of that culture at the time of LHIIIA and LHIIIB. Furumark distinguished three successive styles in LHIIIA pottery: LHIIIA₁, LHIIIA₂early, and LHIIIA₂late. However, as seen in the many examples of Mycenaean pottery classified as LHIIIA₂/B, the distinction between LHIIIA₂ and LHIIIB pottery is not always clear. As a result, the date of the beginning of the LHIIIB period, which has been discussed mainly in relation to stirrup jars found in datable contexts in Egypt, has not yet been firmly established.

The purpose of this paper is to make a precise typological analysis of LHIIIA₂late and LHIIIB stirrup jars as a means of throwing some light on this problem.

Among the motifs painted on the shoulder of the stirrup jar, the Mycenaean flower motif (FM18C) stands out because of its relatively complex structure. It can be analyzed in detail, and if by so doing it became possible to trace the process of its change more precisely than is done by Furumark, the motif would obviously provide a useful criterion in distinguishing between LHIIIA₂late and LHIIIB stirrup jars. It is worth noting, in this respect, that this motif is often painted as one of the filling motifs on the pictorial necked craters, whose stylistic changes appear to be more readily and precisely traceable than those of other Mycenaean pottery. In the case of the necked chariot-crater, for example, at least five successive styles representing five phases of its development (see Pls. 1—5) can be distinguished (see pp. 239—44).

The distinction between the fourth and fifth phases of the chariot-craters would seem to be important in any discussion of the definition of LHIIIA₂late and LHIIIB. The stylistic differences between the two phases are well defined. The new typological features perceived in the shape of chariot-craters of the fifth phase are: the exaggeratedly high neck (a relatively high neck may have already appeared by the fourth phase); a depressed body; a barely detectable shoulder; and a lip that is short and horizontal or sloping, directly continuing to a splaying neck. Where motifs are concerned, the new typological features are: highly

degenerate horse and chariot motifs (for example, horses with exaggeratedly elongated bodies, charioteers who protrude beyond the chariot); a rigidly drawn motif hanging from the reins; and IV- and VI-type flower motifs (see Fig. 3). It is also noteworthy that the I-type flower (flower head), whose use as a filling motif, as with other filling motifs, tends gradually to diminish, is not found on the fifth-phase chariot-craters except for one lozenge-shaped example (see Fig. 4 : 27), the basic element of which, the lozenge, is seen in the stem of a V-type flower motif (see Fig. 3 : V right). Since V- and VI-type flower motifs are characteristic of Zigouries kylixes, which are considered a criterion marking the beginning of LHIIB, it is significant that they are not seen on the chariot-craters of the fourth phase, but are on those of the fifth phase. If the dividing line between LHIIA₂late and LHIIB is drawn according to this criterion, the beginning of the LHIIB period cannot occur until the fifth phase of the chariot-craters.

Figure 4 shows I- and II-type flower motifs. The Roman numerals represent the five phases of the chariot-craters, while the flower motifs beside them are those which seem to appear for the first time in each respective phase. The flower motifs of the fourth phase can be distinguished stylistically from those of the third and fifth phases. It is noteworthy that the characteristic petal and anther drawn with one stroke (see Fig. 4 : 16—19), which Furumark regarded as characteristic of LHIIB, appears in the fourth phase. This anther may derive from that seen in Fig. 4 : 13, 14, and may be an antecedent of that seen in Fig. 4 : 28, 29, 33. The anther with both ends attached to the end of the petals as seen on a chariot-crater of the fourth phase (see Fig. 4 : 20) may also derive from the anther seen in Fig. 4 : 13, 14. The flower motif of Fig. 4 : 26, whose anther is angular and attached to the end of the petals, may be an antecedent of that in Fig. 4 : 27. Furumark regarded the angular anther, together with the hook-shaped anther, as a characteristic of LHIIB, but the hook-shaped anther is seen on a chariot-crater of the third phase (see Fig. 4 : 10), while the angular anther is seen on a kylix (see Fig. 3 : III left) whose shape is comparable with another kylix on which the flower motifs of Fig. 4 : 10, 12, 13 are painted. It seems probable that the angular anther also appears at the third phase, and that it is from this that the anther seen in Fig. 4 : 26 was derived. It is also noteworthy that the flower motif with no anther and that with neither anther nor stamen do not occur in LHIIB pottery deposits, but occur in LHIIA₂late deposits at Mycenae (see Fig. 4 : 22).

Apart from the details of the flower motif, differences between the fourth and fifth phases are observable in its arrangement within the shoulder zone of the stirrup jar, and in particular in that of the two flower motifs painted on either side of the spout; specifically,

in the fourth phase these two flower motifs are commonly painted obliquely upward and facing each other or turning in opposite directions, while in the fifth phase they are painted obliquely downward or turning sideways and in the same direction.

Where the decoration of the body zone of the stirrup jar is concerned, the methods employed may be classified as follows: (see Fig. 5)

- a. There are no horizontal lines, either thin or thick.
- b. There is (are) one, or a few, thin lines.
- c. There is one thick line bordered on each side by a thin line.
- d. Similar to (b), but the vacant spaces are decorated.
- e. Similar to (c), but the vacant spaces are decorated.
- f. There is a simply decorated, thin band.
- g. There is a rather wide band decorated with motifs seen in the stem of IV-, V-, and VI-type flower motifs.
- h. Similar to (g), but the vacant spaces are decorated.

All except c and e are associated with flower motifs of the fifth phase on the same stirrup jars, while e is found in a LHIIIA₂late deposit at Mycenae. On the other hand, a, b, d, and f are also associated with flower motifs which seem to appear first in the fourth phase, while d and e may be antecedents of h, which is found only in an LHIIIB pottery deposit. Thus the only two among these methods of decoration that can be considered as peculiar to the fifth phase are g and h; all the others would seem to appear by the fourth phase.

Also noteworthy is a type of decoration painted in white on a thick horizontal line encircling the shoulder of a stirrup jar. This is not found in LHIIIB pottery deposits at Mycenae, and is not associated with flower motifs definitely classified as belonging to the fifth phase, but with those of the fourth phase. Furthermore, no zonal motifs characteristic of the fifth phase are found among motifs used in this form of decoration. All this would seem to indicate that this type of decoration was not used in the fifth phase of the stirrup jar.

Where the shape is concerned, it is significant that the low, flat top, angular profile and tall shape of FS 166, which Furumark dated as LHIIIA₂late, is comparable with the "conical" shape of FS 182 and FS 183, which Furumark regarded as characteristic shapes of LHIIIB. He compared FS 182 with FS 167, which he dated as LHIIIB, but the comparison lacks sufficient basis, since one point of comparison, the torus disc base, is also recognized by Furumark himself as LHIIIA₂late, while another, the rounded shoulder, is not an essential feature of FS 182. The shape of FS 182 should be related, rather, to stirrup jars found in the Ivory-

Pottery Hoard at Thebes (see Pl. 6 : 2) or that from Skopi in Rhodes (see Pl. 6 : 1), in which the flower motifs painted on the shoulder make it difficult to ascribe them to the fifth phase of the chariot-crater. Where this point is concerned, it should be noted that the stirrup jar from Skopi has been compared to the stirrup jar from the "Petsas house" deposit at Mycenae (Åström, et al, p. 53), which is regarded as LHIIIA₂late and in which flower motif with petal and anther drawn in one stroke are seen. Moreover, a flower motif painted on the shoulder of FS 182 (see Fig. 4 : 25) is comparable with flower motifs of the fourth phase.

All this suggests, then, that, FS 182 can be considered to appear by the fourth phase. If this is in fact so, then there seems to be no reason to limit the appearance of FS 183, a low conical stirrup jar, to LHIIIB, i. e. the fifth phase of the chariot-crater. Furthermore, a white painted zonal decoration which may be considered as characteristic of the fourth phase is seen on a FS 183 stirrup jar (see Pl. 6 : 6). FS 183 is compared by Furumark with FS 180, which he ascribed to LHIIIB; however, the shoulder of the latter has a flower motif (Morricone, 1967, 252, Fig. 277) comparable in its detail and arrangement with that of Fig. 4 : 25. It seems possible thus that FS 183 and FS 180, as with FS 182, appeared by the fourth phase of the chariot-crater.

If, now, bearing in mind these remarks on the typological distinction between stirrup jars of the fourth and fifth phases, one examines the stirrup jars found within dated deposits in Egypt, there exists —so far as the present writer can tell— no stirrup jar among the deposits dated before Seti I that is definitely attributable to the fifth phase. Wace has pointed out the existence of an FS 180 stirrup jar in a house deposit at Gurob which is datable to the time of Tutankamun on account of a pendant bearing the latter's name. However, even apart from the problem of the contemporaneity of this stirrup jar and the pendant, the association of them in this deposit cannot be proved since Petrie was not clear on this point. Moreover, the stirrup jar in question presents no typological feature limiting it to the fifth phase. The same would seem to be true, so far as the present writer can judge from the photograph and the description, of two stirrup jars from el-Amarna discussed by Hankey and Warren: Cairo Museum 66742 and UCL PC 725+742. The U-pattern on the shoulder of Cairo Museum 66742 seems to indicate an earlier date than the fifth phase (cf. BSA 60, 163, Fig. 1 : 8). According to Petrie, one stirrup jar, BM A986, which can be dated to the fourth phase on account of flower motifs painted on the shoulder (Fig. 4 : 23, 24), was found in a house deposit at Gurob dated to the early XIX Dynasty, and another similar stirrup jar was found with burials also ascribed to the same time. If Petrie's dating of the deposit and burials is

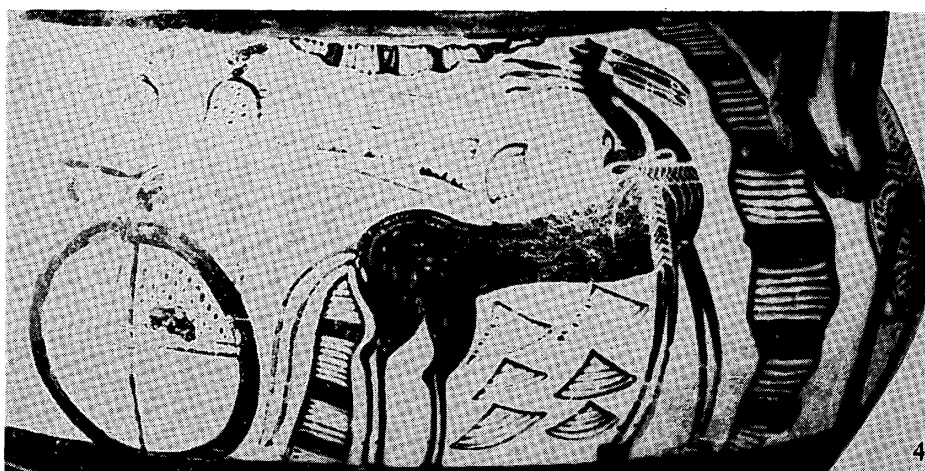
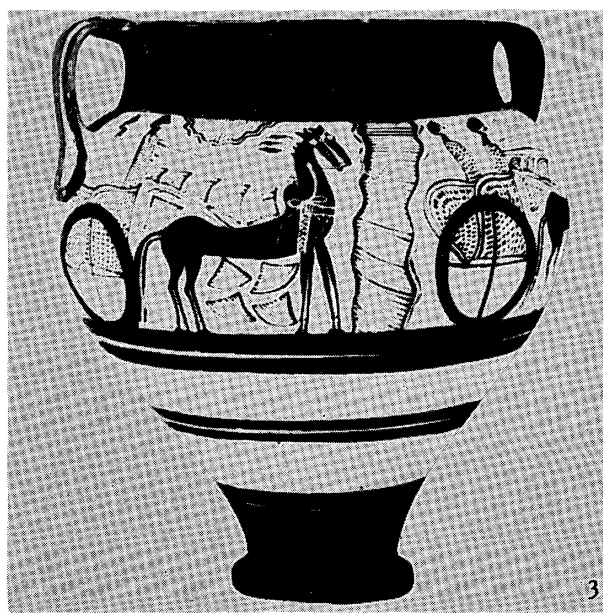
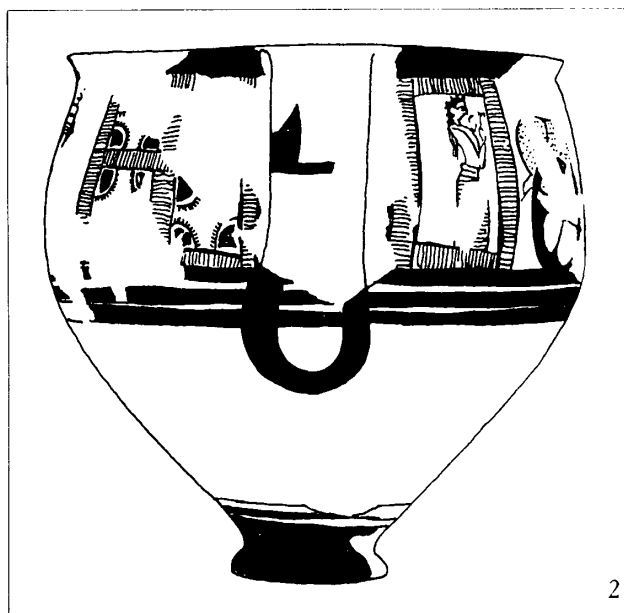
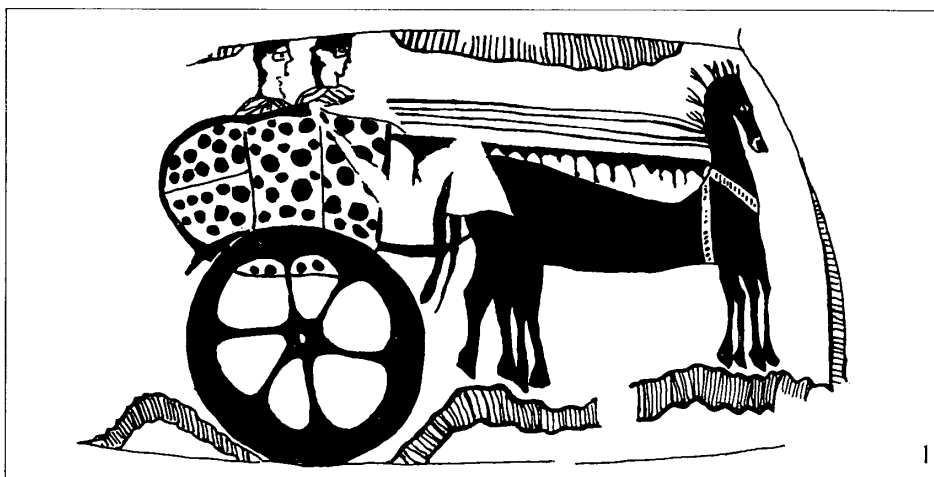
Dating the Beginning of Late Helladic III B

correct, and the contemporaneity of these stirrup jars with the deposit and burials is admitted, it follows that the fourth phase lasted at least until this time.

In conclusion — and despite a recent theory that would push back LHIIIB to the time of Tutankamun — so long as one accepts, as French suggested, the appearance of the Zygouries kylix as the criterion for the beginning of LHIIIB, it would seem to be difficult to date the beginning of LHIIIB before the early XIX Dynasty of Egypt.

Note: After writing this paper, the present writer received a recently published book by E. Vermeule and V. Karageorghis, entitled "Mycenaean Pictorial Vase Painting", in which a very precise chronology of the Mycenaean pictorial vase is proposed and a late date for the beginning of the LHIIIB period, 1300 B.C., is accepted. The chariot-crater series presented is not wholly in accord with that in this paper. However, it is not possible here to comment fully on the chronology of Vermeule and Karageorghis. The table below shows the typical chariot-craters of each five phases as proposed in this paper, together with the dating suggested by Vermeule and Karageorghis.

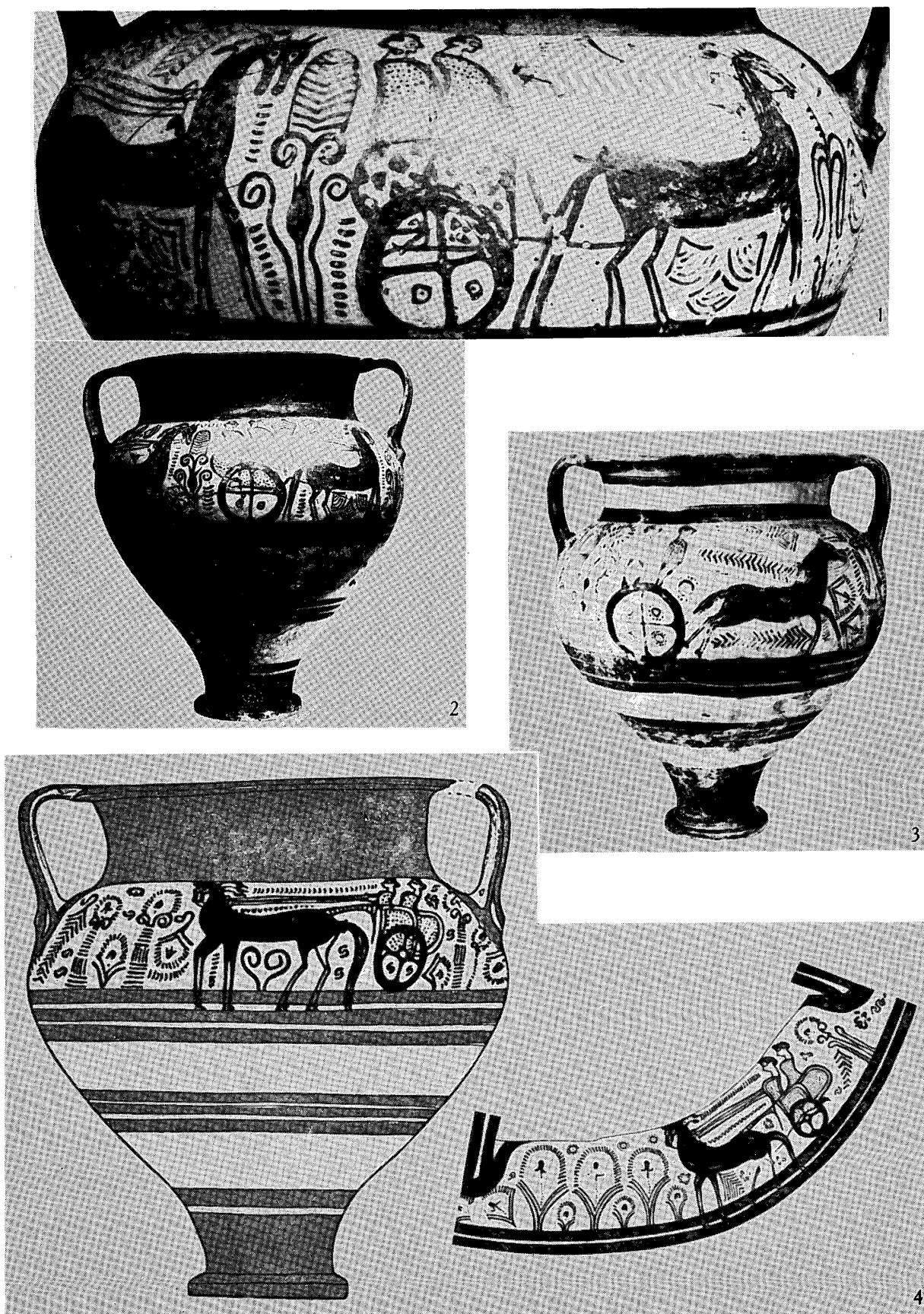
Necked chariot-craters		Phase	Dating by Vermeule & Karageorghis
Metropolitan Museum 74, 51, 964 (C.P. 1403)	(Pl. 1 : 3, 4)	I	Early III
British Museum C344 & C348	(Fig. 4 : 1, 2)	I	Early III
British Museum 1911/IV-28/1	(Pl. 2 : 1, 2)	II	Middle I
G. G. Pierides Collection no. 33	(Pl. 2 : 3)	II	Middle II
IEJ 20 (1970) p. 93, Fig. 1. Tell Dan	(Pl. 2 : 4)	II	Middle III
Cyprus Museum A 1645	(Pl. 3 : 1, 2)	III	Middle II
Medelhavsmuseet, Enkomi T. 3 no. 163	(Pl. 3 : 3)	III	Middle II
Larnaca District Museum CM 1958/V-20/3	(Fig. 4 : 11)	III	Middle II
AAS 11 (1961) 191 f., figs. 8-9. Ugarit	(Pl. 3 : 4)	III	Middle III
A. Georgiades Collection	(Pl. 4 : 1, 2)	IV	Middle II
BCH 84 (1960) 518 f., figs. 13-14. Kition	(Fig. 4 : 20)	IV	Middle II
Medelhavsmuseet, Enkomi T. 3 no. 261	(Fig. 4 : 21)	IV	Middle III
Musée du Sèvres		IV	Middle III
Sjöqvist (1940) Fig. 20.1. Enkomi, T. 11.33	(Pl. 4 : 3)	IV?	Ripe I
Hesperia 18 (1949) 154 f. Pl. 23-24. Corinth	(Pl. 5 : 1, 2)	V	Ripe
Bonn, Akademisches Kunstmuseum no. 777	(Pl. 5 : 3)	V	Ripe I
Metropolitan Museum 74, 51, 966 (C.P. 1405)	(Pl. 5 : 4)	V	Ripe I
Museum of Fine Arts, Boston 01, 8044	(Fig. 4 : 27)	V	Ripe I



c. 1 : 7 (No2), c. 1 : 6 (No3)

第1段階の戦車文クラテル

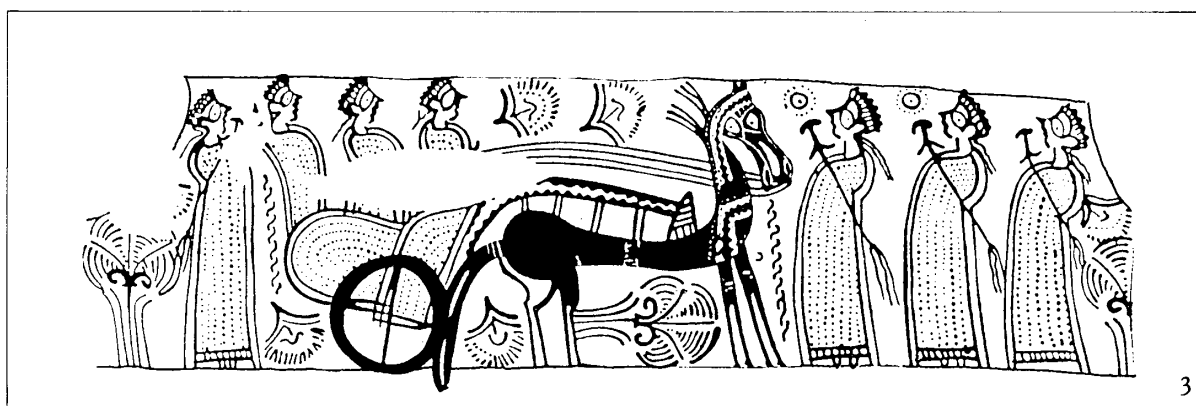
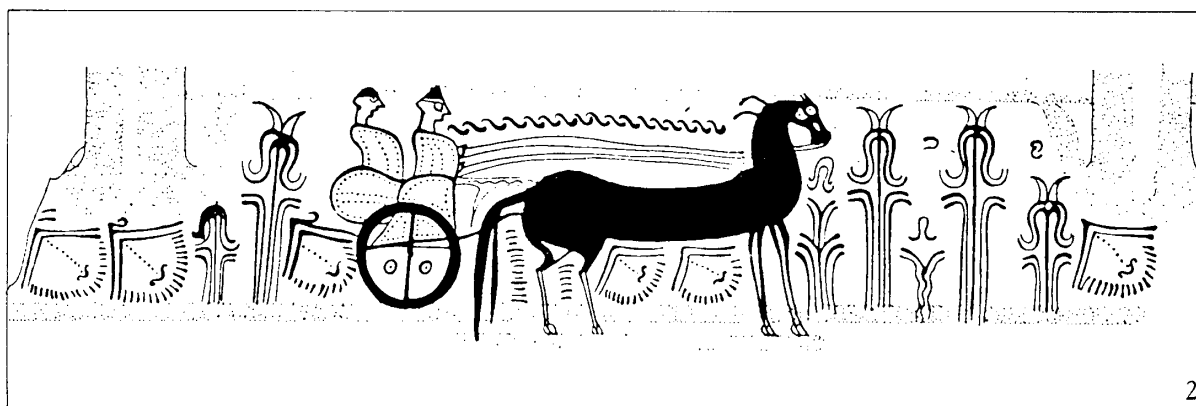
The chariot-craters of the first phase



c. 1 : 8 (Nos. 2, 3), c. 2 : 9 (No 4)

第 2 段階の戦車文クラテル

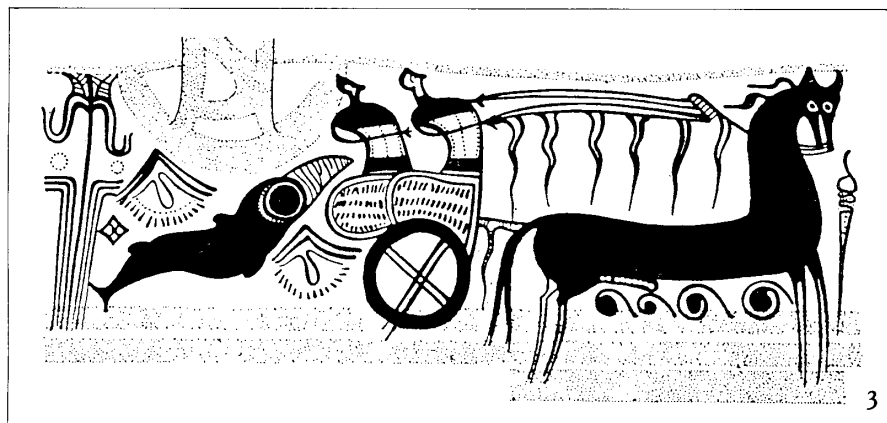
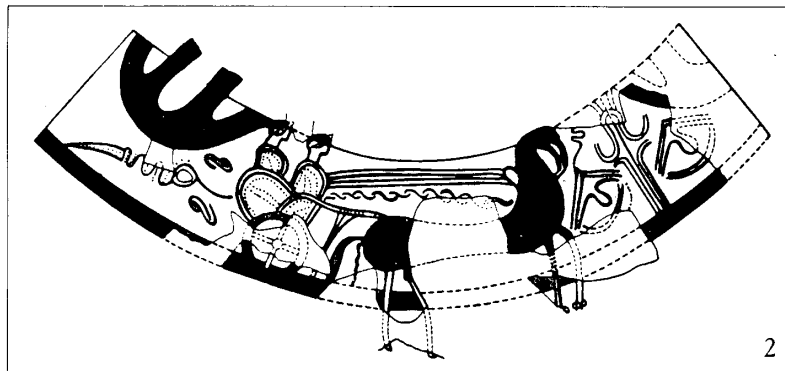
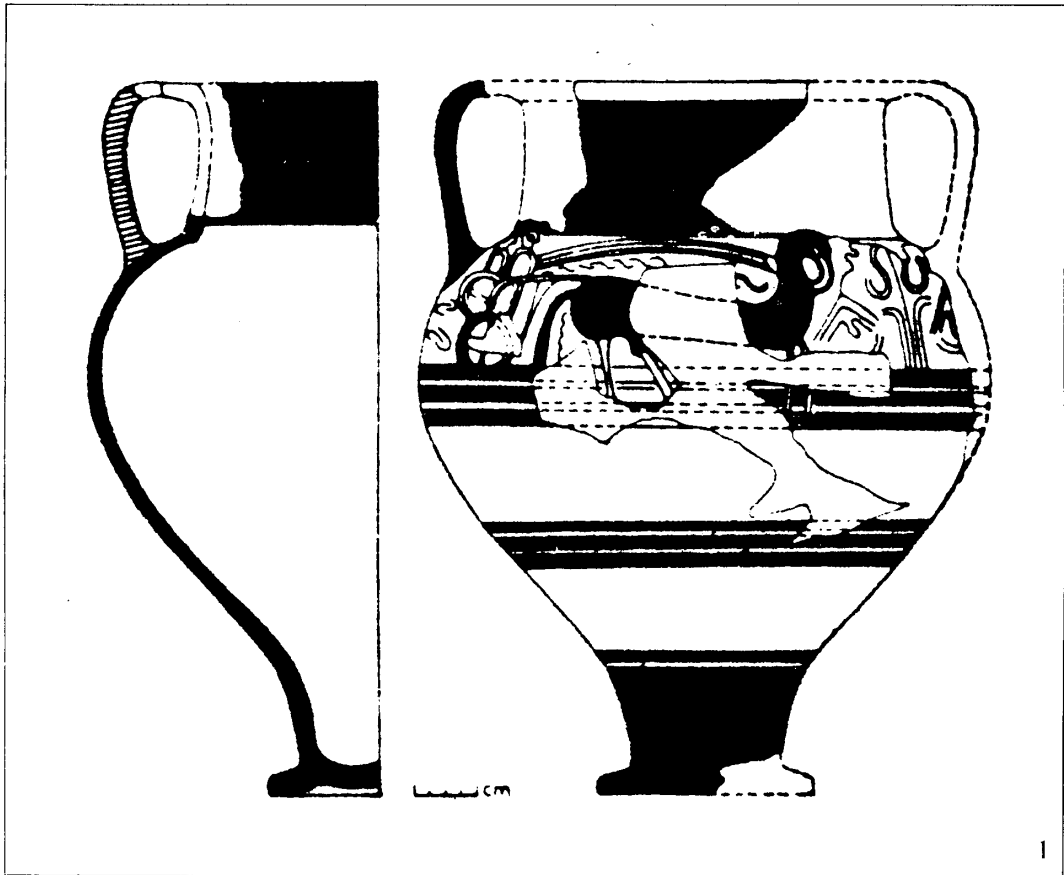
The chariot-craters of the second phase



c. 1 : 6 (No1)

第3段階の戦車文クラテル

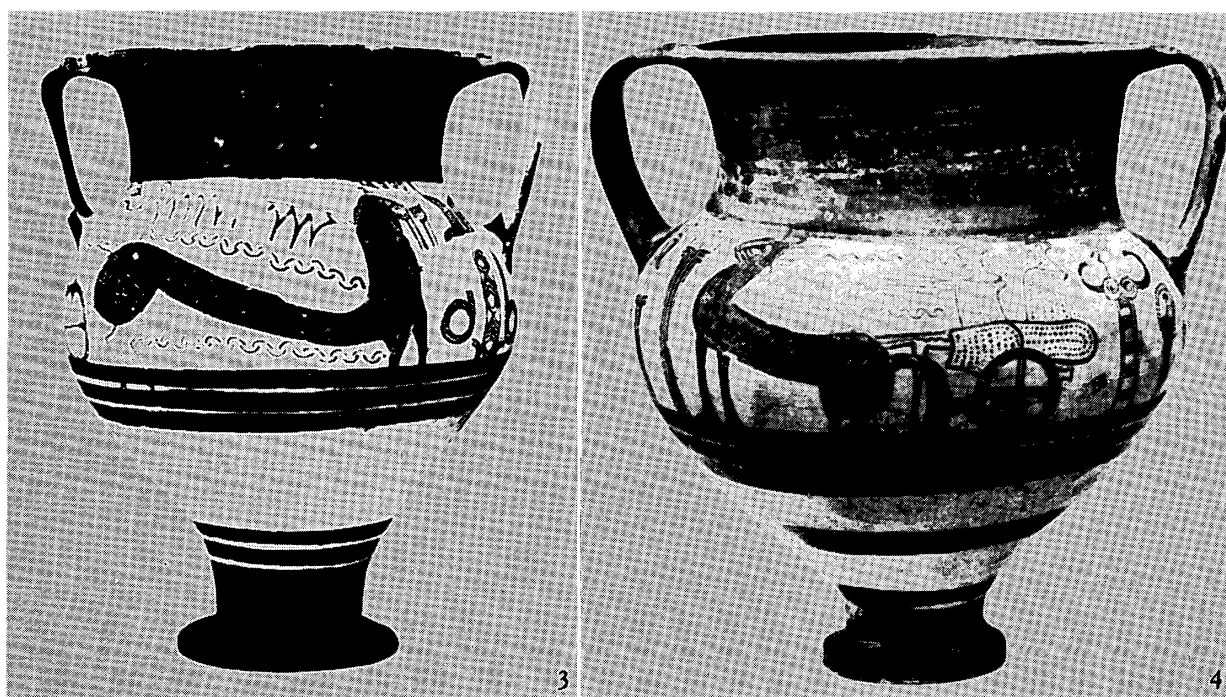
The chariot-craters of the third phase



1 : 5 (No1)

第4段階の戦車文クラテル

The chariot-craters of the fourth phase



c. 1 : 5 (No1), c. 2 : 11 (Nos. 3, 4)

第5段階の戦車文クラテル

The chariot-craters of the fifth phase



c. 1 : 2 (No. 1), c. 1 : 3 (Nos. 2, 3, 7)

c. 1 : 4 (Nos. 4-6)

第4段階の鐙壺と三把手付水差

The stirrup jars and three handled jar
of the fourth phase



c. 1 : 3 (Nos. 1-3), c. 1 : 4 (Nos. 5-7)

c. 2 : 9 (No 4)

第 5 段階の 鍔 壺

The stirrup jars of the fifth phase

図 版 出 典

図版 1 : 第 1 段階の戦車文クラテル

1. Karageorghis, 1968, Pl. 72
2. Vermule, 1964, Pl. XXXIII, A. (cf. Karageorghis, 1957, pp. 269—70, Figs. 1—4)
3. Immerwahr, 1945, p. 545, Fig. 8.
4. Ibid., p. 546, Fig. 10.

図版 2 : 第 2 段階の戦車文クラテル

1. Johnson, 1980, Pl. L, 248 : B
2. Ibid., Pl. L, 248 : A.
3. Karageorghis, 1965, Pl. 1 : 2.
4. Biran, 1970, p. 93, Fig. 1.

図版 3 : 第 3 段階の戦車文クラテル

1. Karageorghis, 1963, Pl. 7 : 1, 2.
2. Sjöqvist, 1940, Fig. 19 : 2.
3. Schaeffer, 1961, p. 202, Fig. 9.

図版 4 : 第 4 段階の戦車文クラテル

1. Karageorghis, 1977, p. 733, Fig. 54b.
2. Ibid.
3. Sjöqvist, 1940, Fig. 20 : 1.

図版 5 : 第 5 段階の戦車文クラテル

1. Weinberg, 1949, Pl. 23, 36.
2. Ibid., Pl. 24, 39.
3. Kaiser, 1976, Pl. 32 : 2.
4. Immerwahr, 1945, p. 544, Fig. 11.

図版 6 : 第 4 段階の罍壺と三把手付水差

1. Åström et al, 1980, Pl. 19 : 4, 5.
2. Symeonoglou, 1973, Pl. 43, Fig. 135.
3. Karageorghis, 1965, Pl. 18 : 5, 6.
4. CVA Denmark Pl. 58 : 10.
5. Smith, 1925, Pl. 2 : 15.
6. Ibid., Pl. 3 : 32.
7. Robinson, 1930, Pl. VII : 106.

図版 7 : 第 5 段階の罍壺

1. CVA Denmark, Pl. 58 : 3.
2. Robinson, 1930, Pl. VII : 105.
3. CVA Denmark, Pl. 58 : 7.
4. Forsdyke, 1925, Pl. XIII, A. 903.
5. French, 1967, p. 152, Fig. 2 : 52—261.
6. CVA Denmark, Pl. 57 : 12.
7. Ibid, Pl. 57 : 13.